

ジヨルジェ・アマード 『丁字と肉桂のガブリエラ』(七)

第二部第三章、原文一七九頁から二二二頁までの翻訳

尾 河 直 哉

Tradução japonesa de *Gabriela, cravo e canela* de Jorge Amado (7)

NAOYA OGAWA

キーワード

二〇世紀ブラジル文学 (literatura brasileira do século XX)、『ブラジル北東部 (Nordeste)』、『カカオ地域 (região do cacau)』、『バイーア州 (Bahia)』、『イリエウス (Ilheus)』、『ブラジル民衆文化 (cultura popular brasileira)』

(承前)

噂の女、ガブリエラ

それは丘に暮らす雄猫で、野良同然だった。毛は泥だらけで、ところどころごつそり抜け落ち、耳はポロポロ。いつも近くの雌猫の尻を追いかけていたが、並ぶ者なき闘士で、顔つきもどこか冒険家然としている。斜面に立つ家の台所の食べ物を片っ端からくすね

て、主婦からも家政婦からも憎まれていたが、すばしこいうえに油断のならない性格で、だれひとり捕まえることができなかった。ところがなぜかひとりガブリエラだけはそれに成功した。猫はニャーニャー鳴きながらガブリエラのとをくつついてくるし、やって来ではガブリエラのスカートのなかに潜り込むのである。ひよつとすると、猫が台所の余り物を求めて豪胆かつ慎重な姿を見せても、怒鳴ったり、箒で追い回したりしなかつたからかもしれない。猫は少しずつ馴れてゆき、ついにグアバの木陰で寝るなど、一日の大半を家の裏庭で過ごすようになった。今ではもうそんなに痩せてもいなければ、汚くもなかった。夜になると丘や屋根を走り回って放蕩三昧、子づくりに励む点は相変わらずだったが。

パールから帰ってきたガブリエラが昼食を取るため椅子に腰掛けると、猫は喉を鳴らしながらやってきてガブリエラの脚に軽く触れる。ガブリエラが食べ物を少しやると、あまり気乗りしないようすでしばらく囓んでいるが、手を伸ばして頭やお腹を撫でてやると感

謝してニャーニャーと鳴くのだった。

ドナ・アルミンダにとって、これはまさに奇蹟だった。これほど気の荒い動物が飼い慣らされ、人の手から食べ物もらい、首を撫でられるがままになり、抱かれたまま眠るところを目撃できるなんて、思いもよらなかった。ガブリエラが猫を胸に押しつけ、その獐猛な顔に頬をすり寄せると、猫はくぐもつた声で小さくニャオと鳴き、目を半ば閉じて、爪でガブリエラをそつと搔く。ドナ・アルミンダにとって可能な説明はひとつしかなかった。ガブリエラは霊媒、しかも強力な媒体を持った霊媒だという説明である。まだ開発どころか、これまで発見すらされてこなかったさながらダイヤモンドの原石で、「交霊会」で磨けばあの世と交霊のできる完璧な霊媒になる、というのだ。これほど獐猛な動物を手なずけることのできる霊媒を持った人物がガブリエラの他にいようか？

二人は家の戸口に腰掛けていた。寡婦は靴下を繕い、ガブリエラは猫と戯れている。ドナ・アルミンダがガブリエラをしきりに口説こうとする。

「ねえあんたさ、一回だつて交霊会逃しちゃだめだよ。こないだだつてデオドロロさんがあたしに訊くんだ。『あの娘はあれからなぜ顔を見せない？ 第一級の霊をもつてるといふのに。あの娘の椅子の後ろにびったりくっついてたぞ』って。これデオドロロ先生が言ったとおりの言葉なんだけどさ、まったく同じなんだよ、あたしが考えていたことと。しかも、デオドロロ先生っていえばこの件にかんしちゃあちよつとした事情通だよ。そう見えないけど、あれでずいぶん若くてさ。若いっていつても、霊とはツーカーだけだね。見てみりゃわかるつて。霊を好きに呼び出したり、引つ込めたり。でも、あんたならさつと有能な霊媒師になれるよ……」

「やだわあたし、そんなの……なりたくない。なんでそんなことしなくちゃいけないの？ 死者にはちよつかい出さない方がいいの。そつとしておいてあげなくちゃ。あたしはやだよ」と言つて、猫の

腹を搔いてやる。猫のゴロゴロいう声が大きくなる。

「でもあんたそれ間違つてるよ。そんなんじや先生の指導が台無しさ。先生の言つてることが分かつてないね。盲人みたいに人生歩むことになつちやうよ。先生は万人に行くべき道を照らし、つまずきやすい障害物を避けさせてくださつて……」

「アルミンダさん、あたしには障害物なんかないわ。それつてどんなもの？」

「障害物云々つてだけじゃなくて、助言だつてしてくれらんだから。このあいだ難しいお産があつたのよ。ドナ・アンパロの。赤ちゃんが産道で動かなくなつちやつてさ。出てきたくないつて。あたしどうしたら良いのかわからなくて、ミルトンさんが医者さん呼んどいてくれたんだけどね。でも、救つてくれたのだからだと思ふ？ 死んだ夫よ。いつもあたしの傍にいてあれこれ助言してくれる死んだ夫。あそこにいる人たちつて」と天を指し、「なんでも知つてるのねえ。医学まで知つてんだから。で、死んだ夫が囁く通りにやつたわけ。そしたら生まれ変わったわよ、立派な赤ちゃんが！」

「産婆さんつてきつと素敵なお仕事でしょうね……新しい命が生まれてくるのを手伝いするんだから……」

「あんたにはだれか助言してくれる人いるのかね。もうじきうんと必要になるつてのに……」

「あたしに助言が必要つて。またなんで……」

「あんたがバカ娘だから。ごめんね、こんな言い方しちやつて。でも、あんたはほんとにおバカちゃんだよ。だつて、神さまからいただいたもの利用してないでしょ」

「まさか。言つてることがぜんぜんわかんないんだけど。あたし、持つてるものぜんぶ使つてるわよ。ナシブさんがくださった靴まで。パールに行くときにはあれ履いてるもん。でも好きじゃないんだ。サンダルの方が好き。靴で歩くのつてイヤ、あれ好きじゃないの……」

「だれが靴の話なんかしてんのよ、ほんとにトンマだね。てことはなんにも分かってないね。ナシブさんがどんなにお前さんに惚れてるか。ぞっこんなんだよ。もうめろめろさ……」

ガブリエラは笑って猫を胸に抱きしめる。

「ナシブさんは良い方よ。なにか気にかけることなんかあるの？ あたしをクビにしようなんて思ってもいいないし、あたしとしてはただあの人に喜んでもらいたいだけ……」

この盲目ぶりに驚いて、ドナ・アルミンダは思わず針を指に刺してしまった。

「指に針を刺しちゃったじゃないか……あんたはこつちが思ってた以上におバカさんだね。ナシブさんから何でももらえるんだよ。金持ちだからね、ナシブさんは。絹が欲しいって言えばくれるし、仕事を手伝ってくれるちびくろ娘が欲しいって言えば、すぐにでもふたり雇ってくれるよ。お金だつて欲しいって言えば、好きならだけくれるし」

「困ってないのに……なぜお金？」

「一生可愛くいられるかどうか、考えたことあるかい？ いま若さを利用しなけりゃ、手遅れになっちゃうんだよ。断言できるけど、あんたナシブさんに何にもおねだりしてないだろう？ 違うかい？」

「アルミンダさんが映画行くと一緒に行くお金はいただいたりけど。それ以上なにねだつたらいいの？」

ドナ・アルミンダはついに堪忍袋の緒が切れた。靴下と卵形の木製糸巻きを掻き集める。猫は驚いて、意地の悪そうな目でドナ・アルミンダを見た。

「ぜんぶ！ あんたがもらいたいものぜんぶだよ」と言ってから、声をひそめて囁く。「うまくやれば、結婚だつてしてくれるわよ……」

「あたしと結婚？ ナシブさんにそんな必要があるかしら。結婚なんか、なんで？ ナシブさんは立派な家族の、どこへ出しても恥

ずかしくない娘さんと結婚すべき方です。なんであたしとなんか結婚を？ そんな必要ないわ……」

「でもあんた、奥様になりたくないの？ 家のなかを仕切つたり、旦那と腕組んで散歩したり、綺麗で高価な服を着たりしたくないの？ どこへ出ても恥ずかしくない女になりたくないの？」

「でも、一日中靴を履いていなくちゃならなくなつたら……あたしイヤだわ……靴履くの嫌いだもん。そりゃナシブさんと結婚できれば嬉しいけれど。死ぬまであの方のために料理したり、仕事を手伝つたり……」と言いつつ猫に向かって微笑みかけ、喉をゴロゴロ鳴らしながら、冷たく濡れた猫の鼻をいじる。「いや、とんでもない。ナシブさんにはもつとやるべきことがあるんだから。あたしみたいな

などこかの馬の骨とは結婚したくないでしよう。この歳でもう身を持ち崩したこんな女……アルミンダさん、あたしナシブさんとの結婚のことは考えたくないの。あの方の頭がおかしくなつたところも想像したくないし」

「でもね、言わせてもらおうけど、あんた。あんたが望むだけいいのよ。事をうまく運んで、押したり引いたりしながら相手をその気にさせれば、それだけでいいんだから。ナシブさん、すでにビクビクもんなのよ。うちのシコから聞いたんだけど、判事さんがあんなのために家買うつもりでいるんだつて。ニョー……ガールが話しているところを聞いてちゃたみたい。ナシブさんの悩みようつたら……」

「あたしイヤよ……」ガブリエラの唇からは微笑みが消えていた。「あんな人、嫌い。判事みたいなあんな醜い年寄り」

「まだ他にもいるのよ……」小声でドナ・アルミンダが言う。と、そこへマヌエル・ダス・オンサスが、例によって田舎者らしい歩き方で通りをやつてきた。女たちの前に立ち止まると、パナマ

帽を取つて、派手な色のハンカチーフで汗を拭う。

「こんにちは」

「こんにちは、大佐」と寡婦が応じた。

「ナシブの家、ここじゃござんせんか？ 娘さんの姿でそうかな」とガブリエラの方を向く。「じつは使用人を探しちよりました。ちかぢか家族をイリエウスに呼び寄せるんだが…だれかご存じかな」

「なんの使用人でしようかね、大佐」

「ん…料理のできる…」

「ここではむずかしゅうございますね」

「ナシブはいくら払つとるかね」

ガブリエラは無邪気な目で大佐を見上げた。

「六十ミルレイスです…」

「良い払いですな、たしかに」

長い沈黙があった。大農場主は家の廊下をじつと眺めている。ドナ・アルミンダは継ぎ布を掻き集めると、挨拶をして立ち去り、自宅のドアの背後に隠れて耳を澄ませた。大佐は満足そうに相好を崩す。

「ほんとのことを言うとな、料理女はいらんよ。家族が来るとき、ひとり田舎から連れてくることになつとるから。いやね、あなたのような娘がしけた料理女をやつてるのが可哀想だな」

「なぜですか、大佐」

「もつたいないんだよ。お鍋に埋もれた暮らしにおさらばできるかどうかは、あなたの気持ちひとつだ。あなたがその気ならわしゃなんでも遣れるよ。こぎれいな家だって、女中だって。どの店でも好きにツケで買い物していいんだ。わしゃお嬢ちゃんの姿形が好きだな」

ガブリエラは、まるで感謝でもするように微笑んだまま立ち上がった。

「わしの申し出はどうかね？」

「申し訳ありません。その気になれないもので。悪くお取りにならないでくださいね。あたしここで満足なんです。なに不足なく暮

らしてますから。失礼させていただいてよろしいですか、大佐…」庭の奥にある低い塀の上からドナ・アルミンダが顔をのぞかせた。ガブリエラを呼んでいる。

「見たかい、すごい偶然の一致だろ。あの人の噂してたらこれだもん。あの男もあなたに家買つてやろうつて口だね…」

「あの人きらい…飢え死にしたつてやだわ」

「言つたとおりだろ。あなたがその気になりやいくらでも…」

「だってあたしちつともその気にならないもん…」

ガブリエラは今持っているものに満足していた。キャラコの服、サンダル、ブローチ、腕輪。二足の靴は、足を圧迫するので好きではなかったけれど。庭にも、台所にも、いつも使っているかまども、寝室として使っている小部屋にも満足していた。ボールで毎日会うあのイケメンたち——ジョズエー先生、トニコさん、アリさん——や優男たち——フェリーベさん、博士、隊長——にも満足していたし、友人のちびくろトウイスカにも、征服が丘の猫にも満足していた。

ナシブにも満足していた。一緒に寝て、毛むくじやらの胸に顔を埋めるのは気持ちよかつたし、太つた大きな男の足の重み、善良な若者の足の重みを尻に感じるのは心地よかつた。ナシブの髭がガブリエラの首筋をくすぐるとガブリエラは全身が震えるのだった。男と寝るのはそんなに気持ち良いけれど、家や食べ物のために、服や靴のために年取つた男と寝るのはイヤだ。若い男とただ寝るためだけに寝るのが良い。ナシブのような強くて善良な男と。

あのドナ・アルミンダも、交霊術にどっぷり浸かつて頭が変になり始めているのね。ナシブさんとの結婚。なんて支離滅裂なアイディアかしら。でも考えていると楽しい。ああ、なんて楽しいの！…あの人の腕を貸す、通りに出て一緒に歩く。靴がきつুকつたつてかまわないわ。映画館に入つてあの人の隣に座る。枕みたいに気持ちのよい肩に頭を預けて。パーティーに行つて、ナシブさんと踊るん

だ。指には結婚指輪：

でも、そんなこと考えてどうするの？ バカみたい：ナシブさんはどうせ立派なお家の娘さんと結婚するのよ。全身おしゃれに身を包んで、靴と絹のストッキング履いて、香水をつけた娘さんと。男に汚されていない処女と。あたしが役に立つことといえれば料理、家の片づけ、洗濯、そして男と寝ることだけ。でも、醜い老人はイヤ。お金のために寝るのもイヤ。ただ歓びのためだけに寝るの。旅の途中ではクレメンテと、農作地ではニョーズイニョと寝たわね。ゼー・ド・カルモもいたつけ。町では若い学生ベビーニョ。なんてお金持ちの家だったのかしら！ お母さんが恐くて、靴脱いで差し足忍び足、そうとやってきたつけな。ガブリエラの初体験はまだ子どものときだった。相手は他ならぬおじ。まだ小さいガブリエラのところ、夜おじがやってきた。年老いた病のおじが。

小さなランプの光

炎天下の下、上半身裸の作男たちが、先に鎌のついた長い棒を手にカカオの実を収穫していた。果実はドスンと鈍い音を立てて次々地面に落ちる。女と子どもがそれを拾って山刀で割ってゆく。蜜で白くなった柔らかなカカオの実を積み上げられ、荷籠に移され、ラバの背に括りつけられた桶で運ばれていった。労働は夜明けとともに始まり、暗くなるまで続けられた。太陽が真上にくるころには、粉をまぶして炙った乾燥牛肉と熟したパラミツの昼食をそそくさ食べる。女たちのあいだからは、ときおり、過酷な労働を歌う歌声が立ち上った。

いきるなあつらいし　くるしみやにがい
おれはくろんぼ　はたらきものよ
おしえておくれよ　だんなさん

おしえておくれよ　おねがいだから
いつになつたら　つみとれるのか
ほれたおいらの　くるしみを

農作地の男たちがこれに応える。

おいらがつむのは　カカオの実
カカオの木になる　カカオの実
：

荷車隊を先導する御者は、柔らかなカカオの実が輸送の途次に着くやいなや、ラバを急ぎ立てる。「ええい、この糞メスラバ！ もつと速く歩けつてんだよ、ディアマンテ！」農園管理人が牽く愛馬に乗ってメルク・タヴァーレスが農作地をあちこち歩きまわり、仕事を監督していた。馬から降りると、女や子どもたちに檄を飛ばす。

「なにをダラダラやってんだ？ もつとさっさとしろ。そんなにゆっくりじゃあ、お嬢様のシラミ取りだ」
掌に置かれたカカオの実の殻をもつと速く二つに割ろうとする
と、そのたび、山刀が指を切りそうになるのだった。農作地いっばいにこだまする歌のリズムも速くなり、収穫部隊の動きも自然と速くなる。

カカオにや蜜が　はたけにや花が
ほれこなにも　あふれてる
おしえておくれよ　だんなさん
おしえておくれよ　おねがいだから
いつになつたら　ねれるのか
ほれたおいらが　愛のどこ

木々のあいだのへび道では、乾いた葉を踏みながら歌う男たちの声が、速くなった収穫のリズムに大きくなっていった。

おいらがつむのは カカオの実

カカオの木になる カカオの実

：

大佐は木を一本一本吟味し、農園管理人は作男たちを怒鳴りつける。日々の重労働が続く。メルク・タヴァーレスがとつぜん立ち止まり、尋ねた。

「ここはだれの担当だ」

農園管理人が質問を繰り返す。作男たちが様子を見に戻ってきた。くろんぼファグンデスが答える。

「あつしつす」

「こつちへ来い」

メルク・タヴァーレスはカカオの木を指さした。いちばん高い枝の濃い茂みの隙間から、収穫しわすれたカカオの実が顔を覗かせている。

「おまえは猿の守護者か？ おれが猿のためにカカオを植えてると思つてるのか？ 怠け者。喧嘩を売つてるとしか思えん」

「へい、だんな。だども見えんかったもんで……」

「見えなかったのは、おまえの農園じゃないからな。損するのもおまえじゃないし。これからは気を付けろよ」

メルク・タヴァーレスは見回りを続けた。くろんぼファグンデスは鎌を上を持ち上げると、優しく善良そうな目で大佐を追った。いったい何が言い返せただろう？ 酔って村に出て、売春宿をめちゃくちゃにしたとき、警察からむりやり連れ帰ってくれたのはメルクだったのだ。ファグンデスと言われるままになるような男では

ない。だが大佐には口答えできなかった。つい先頃だって、イリエウスに行つて新聞社に火を点けるという愉快な仕事をあてがい、高額の報酬をくれたのは大佐ではなかったか？ それに、大佐から言われていたではないか？ 抗争の時代がもうすぐ戻ってくる。お前のように勇気があつて銃の扱いが上手い男が活躍できる時代は、またじきにやってくる。しばらくはカカオを採りながら待つことにしよう。箱のなかで乾燥を待つカカオの実の上で踊ったり、温室のなかで汗をかいたり、桶のなかの蜜で足をべとべとにしながら。だが、予告された抗争の時代はなかなかやつて来なかった。街なかのあの放火くらいじゃとうてい熱くはなれない。それでもファグンデスにとつてあの放火は楽しかった。騒擾を目にすることができた。トラック旅行ができた。脅すだけだとはいえ、空に向かつて何発かぶつ放すこともできた。それに、町に着くやいなやガブリエラの姿を見ることができたのだ。あるボールの前を通り過ぎるときだった。笑い声が聞こえてきた。ガブリエラに違いない。出勤時間まで待機することになっている家に移動中のことだった。一同を先導していたロイリーニョがファグンデスの問いに答える。

「アラブ人の雇つた料理女よ。ヨダレが出そうだけ」

くろんぼファグンデスは姿をひとめ見ようと歩幅を詰めてゆつくり歩いた。ロイリーニョが苛立つて急ぎ立てる。

「ほれほれ、浅ぐる。人目に付くじゃないか。計画がおじゃんになたらどうする。さつさと行くぞ」

農場に帰ると、星降る広大な夜空の下、アコーデオオンが孤独で悲しい音色を響かせるなか、ファグンデスはクレメンテに話を語つて聞かせた。小さなランプの赤い光が畑の暗がりにも人影を映し出す。二人の目にはガブリエラの顔が、踊る姿態が、長い脚が、軽快な足取りが見えるようだった。

「きれいだったで、一目見とかにやよ……」

「ボールで働いてたのか？」

「パールの料理女だ。トルコ人の下で働いてる。牛みてえな顔したデブ男よ。あの娘、しゃれた服着てたっけな。サンダル履いて、ござっぱりした格好だよ」

小さなランプの光を受けて、クレメンテの姿がろううじて見える。背をまるめて耳を澄まし、じっと思いに耽っている。

「通りかかったとき、ちよと笑い声が聞こえてきたんだけんどな、だれかに笑いかけてた。どこぞの大金持ちだんべ。なあ、クレメンテ。あの娘、耳にバラ挿してたぞ。あんなん初めてみたで」
耳にバラを挿したガブリエラの姿がランプの光に溶けて消えていった。クレメンテは甲羅に収まった亀のように縮こまっている。

「で、大佐の家の奥に連れてかれた。奥さん見たで。ありや病気だな。幽霊みたようだった。娘さんも見たで。こぼれんばかりの美しさってんだろが、高慢ちきでな。おれらの横通ったってちらりとも見ねえんだ。たしかに別嬪は別嬪だよ。でもなあクレメンテ、ガブリエラみたいな娘は二人といねえな。なにが違うんだろ、クレメンテ、なあ…」

なにが違うのか、クレメンテにも分かりようがなかった。セルタン地帯、半乾燥地帯、その後緑成す牧草地帯と旅し、夜ともなれば、胸に顔を埋めてくるガブリエラといつも一緒に寝ていたクレメンテだが、そんな男にも分かりようがなかった。なにひとつ教わることなく、なにひとつ発見できなかったのだ。でもガブリエラには何かがある。けっして忘れることのできない何か。肉桂の色の肌？ 丁字の香り？ 笑い声？ いったい何なのか。ほとぼり出る熱が肌を焼き、身体を内側から燃やす。それは炎そのものだった。

「新聞紙は炎に包まれて、瞬く間に焼けちまつた。ガブリエラに会いに行つて、一言でもええから話したかったんだが。どうしようもなかった。会いたい気持ちはやまやまだった」

「それつきりか？」

小さなランプの光を宵闇が包んでゆく。ガブリエラのいない夜が深くなつていった。犬の遠吠え、フクロウの鳴き声、ヘビのシューシューという音が聞こえてくる。じっと押し黙ったまま、二人は郷愁の念に耽つた。くろんぼファグンデスがランプを消し、二人は寢床へと向かう。広大で孤独な宵闇に包まれて、ムラートのクレメンテはガブリエラの記憶を掻き集めた。微笑んだ顔、よく歩く足、浅黒い太股、つんと突き立った乳房、黒々とした下腹部、丁字の香り、肉桂色の肌。クレメンテはその身体を腕に抱いて、枝でできたベッドまで運んで行ったものだ。それからガブリエラと一緒に寝る。するとガブリエラはクレメンテの胸に顔を埋めてくるのだった。

ダンスパーティーとイギリス人の話

その年にイリエウスで起きた重大事件のひとつが、商業会議所の新本部ビル竣工だった。数年前に設立されたばかりの商業会議所だから、新本部ビルといつても実はこれが初めての専用ビルで、それまでは、会長であり南部の複数の会社で代表をしているアタウルフォ・パツソスの書齋が本部として使われていた。最近、この商業会議所はイリエウスの暮らしにとって重要なファクターになりつつあつて、町の牽引役として影響力を発揮し始めているところだった。二階建ての新本部ビルは、パール・ヴェズーヴィオの近くにあつて、サン・セバステイアン広場と港を結ぶ通りに面している。竣工記念パーティーの飲み物、つまみ、デザートはナシブの店に注文が回ってきた。今度こそ、ガブリエラの手伝いとして若いムラータを二人雇わなければならない。それほど大きな注文だったのである。

だが、竣工記念パーティーの前に指導部の選挙があつた。商業会議所役員名簿に名を連ねるためには、以前なら、卸業者や小売業者、輸入業者や輸出業者にごまさえすればそれで事は済んだ。今で

は役員ポストを競わなければならない。ただ、ポストが得られれば箔はつくし、銀行は信用してくれる。町の行政に意見することもできる。候補者名簿はふたつ提出されていた。ひとつはバスターズの子分が名を連ねたもの。もうひとつはムンデイーニョ・ファルカンの友人たちが名を連ねたものである。今やバスターズとムンデイーニョの両陣営は、こうしてにらみ合ったまま事あるごとに対立を繰り返していたのである。輸出業者、さまざまな卸・小売業者、輸入会社の社長によって署名がなされたマニフェストが『日刊イリエウス』に載った。そこには会長再選を目指すアタウルフォ・パッソスを筆頭に、副会長にムンデイーニョ、公式弁士に隊長の名が候補者としてあがり、その他の著名人も脇を固めている。一方、『南部報知』にも、似たようなマニフェストが商業会議所のお歴々の署名で発表された。会長候補にはアタウルフォ・パッソス。この名前にかんしては両陣営とも文句なく一致している。政治活動と無縁だったばかりでなく、商業会議所の発展にも多大な功績があったからである。副会長にはラミーロ・バスターズの懐刀でイリエウスで最大の商店を持つシリア人マルーフの名前があがっていた。バスターズは、自分の土地で何年も前にマルーフが一軒の食料品店を開いたときからこの男とは親しくしていた。公式弁士にはマウリーシオ・カイレス。第四書記という地味なポストながら、アタウルフォ・パッソスの他にもうひとり、両陣営の候補者名簿ともに名前をあげている人物がいた。アラブ人ナシブ・A・サアドである。両陣営の力は伯仲しており、接戦が予想された。だが、賢明で読みの深いアタウルフォはこう公言した。候補者を統合して名簿を一本化しないかぎり立候補は受け入れられない、と。両者を納得させるのは難しかった。とはいえ、そこは老練なるアタウルフォのこと。ムンデイーニョのところに自ら出向いてその公德心を褒めちぎり、地域と商業会議所にたいする常日頃からの貢献を持ち上げて、あなたのような人物を副会長に迎えらるるの光栄だと述べた。商業会議所は政争から距離を

取り、両勢力がイリエウスと故郷のために一致協力できる中立地帯に留まるべく努力しなければならない。輸出業者もきつとそう感じているはずだ。アタウルフォの行動の裏には、ムンデイーニョに対するそんな信頼感もあったのではなからうか。アタウルフォの提案は、副会長のポストを二つ作り、書記、会計、弁士、司書をそれぞれ二分することによって二つの名簿を一本化し、嘆かわしい政治的分裂に左右されることなくイリエウスに真の発展をもたらそうというものだった。

ムンデイーニョは提案を受け入れた。それどころか、副会長候補を降りても良いとさえ密かに考えていた。だが、そのためには友人たちの意見を聞かなければならない。ラミーロ大佐と違って、ムンデイーニョは一方的に命令したり、同志の意見を聞かずに決定したりしない。

「みんなは賛成すると思います。もう大佐にはお話しになりましたか？」

「まずムンデイーニョさんのご意見をお聞きしたかったもので。大佐には午後お目にかかります」

ラミーロ大佐との交渉はさらに困難だった。老大佐は最初腹を立て、どんな説得にも耳を貸さなかった。

「土地に根のないよそ者めが。一株のカカオも持つとらんだろが」

「大佐、わたしも持っておりません」

「あんたの場合は別だ。もう五十年以上ここにおいでになる。誠実で家庭の良き父親だし、他人を惑わすためにここへやってきたわけでもない。妻帯者のくせしてわしらの娘たちを誘惑するような男を連れてくることもなければ、すべてが無価値と言わんばかりにひっくり返すこともない」

「大佐はわたしが政治家でないことをよくご存じのはずです。選ぶ側ですらありません。ただみなさんと仲良くやってゆきたい、それだけです。あちらとも、こちらとも。ただ、イリエウスではこれ

から間違ひなく多くのことが変わってゆくでしょう。古き良き時代は終わりました。とはいっても、これまで大佐ほゞイリエウスを変えてきた人間がほかにいるでしょうか？」

昂進した怒りが爆発寸前にまでなっていた老大大佐も、交渉上手なあきんどが発した最後の言葉に溜飲を下げた。

「そうだ、わしほゞイリエウスを変えた人間がほかにおるか？…」と相手の言葉を繰り返して、「かつてここはこの世の果てだった。廃村だった。それを忘れちゃいかん。それがきょう日、イリエウスほどの町はどこ探してもない。なのに、なぜやつらはわしが死ぬまで待てないんだ。わしやまだピンピンしとるぞ。人生も終盤にかかったわしになぜこんな恩知らずな真似をするんだ。わしが何をしました？ どんな男かまともにも知りませんあのムンデイーニヨ氏の、わしがいっただいどを攻撃したつていうんだ？」アタウルフォ・パツソスはなんと答えてよいか分からなかった。大佐の声は震えていた。落ちぶれた老人の声だった。

「誤解なさらぬように。ある種のことを変えて別のものを作ることに、わしは別段反対しているわけではない。だが、もうすぐ世界でも終わるかのように、なんでやけつぱちになってあんなに急いどるんだ？ 時間ならまだ十分にあるだろう——ここから大土地を持つ無敵のラミーロ・バストスが新たに立ち上がってくる——」なにも愚痴をこぼしとるわけじゃない。わしは闘う男だ。恐いものなどない。あのムンデイーニヨ氏は、自分がこの地に降り立ったときからイリエウスが始まったかのごとくに勘違いをしておる。過去に蓋をしようたって、だれにもそんなまねはさせんぞ。やつをぎやふんと言わせてやる。このペテンの代償は高いからな…やつに選挙で勝つて、イリエウスの外に放り出してやる。だれにも邪魔させるもんか」

「大佐、わたしとしては関わり合いになるつもりはいっさいございませぬ。ただ商業会議所の問題を解決したいだけなんです。そん

な政争に巻き込まれて良いことなどありませんか？ 商業会議所はけつきよく政治と何の関係もないんです。ただ商売と取引の利益にかかずらうだけのことですから。ひとたび政治にかかわったらすべてが水の泡。そんな愚かなことをしてまで持てる力を浪費する必要がありますか？」

「で、ご提案とは？」

アタウルフォは説明した。ラミーロ・バストス大佐はステッキに顎を乗せて聴いている。きれいに髭を剃った皺だらけのきゃしゃな顔。目にはさきほどの怒りがちらちら燃え残っている。

「よしわかった。このわしが商業会議所をダメにしたなんて言われたくないからな。あんたには恩もある。心安くお帰りください。マルーフくんにはわしが話しておく。副会長はふたり平等でよろしいんですな？ 第一副会長、第二副会長というんではなくて」

「平等です。ありがとうございます、大佐」

「このこと、ムンデイーニヨ氏とは話したのか？」

「まだです。まず大佐のご意見を伺っておこうと思ひまして。ムンデイーニヨさんのところにはこれからお話しに参ります」

「突つばねられるかもしれんぞ」

「大佐がこうして飲んでくださりたいじょう、ムンデイーニヨさんが受け入れないわけにはまいらないでしよう？」

ラミーロ・バストス大佐はほくそ笑んだ。おれの方が先なんだな。

かくてナシブは、アタウルフォ、ムンデイーニヨ、マルーフ、宝石商のピメンタ、マウリーシオ博士、隊長カピタン、その他の名士とともにイリエウス商業会議所第四書記に選ばれた。アタウルフォ・パツソスにとつて、いささか難問だったのが公式弁士をだれにするかという問題であった。名簿の掉尾に位置する司書職を引き受けてもらえよう隊長カピタンを説得するのは難しかった。だが、隊長カピタンはすでに五月十三日エウテルペー祭の公式弁士ではないか？ マウリーシオ博士は

どのクラブ、どの協会の弁士でもない。しかも、図書館に割り当てられた相当の予算を使って本を選び、購入できる人間が隊長カピタンの他にいるだろうか？ この図書館は実質的にイリエウスの公共図書館になつていて、だれでも閲覧できるし、事実、老いも若きもやつてきては読書を楽しんだり、教養を身につけたりしていた。

「ありがたいお話ですが、ジョアン・フルジェンシオもいるし、博士もいらっしゃる。適任者といえはこちらのお二人の方で……」

「でも、そのお二人は候補者名簿に名前がないんですよ。博士は商業会議所のメンバーでさえありません。ジョアンさんは固辞ドクトールなされて……あなただけなんです。代わりにだれを立てられますか？ あなたは弁士職を、町で最良の弁士職をもうなさっていらっしゃるわけですし」

本部棟竣工記念パーティーと新執行部役員の就任式は特筆に値する見物だった。午後になると、大広間——一階のスペース全体を占め、後に図書館として使われ、ミーティングや講演会がもたれることになつていた(ちなみに、二階はさまざまな部署と秘書課が置かれる予定)——にはシャンペンとスピーチのあいだに新指導部役員が雁首揃えて座っている。ナシブはこのセレモニーのために服を新調した。真っ赤なネクタイ。ピカピカの靴。指にはひとつはめの寶石。さながら大農場主の旦那コ罗纳ルのようである。

夜にはダンスパーティーが催され、ナシブの用意した種類豊富でおいしい立食料理ピュックアップが出された(ナシブがこの機会を捉えて大もうけをしたとプリーニオ・アラサーは吹聴してまわったが、事実無根である)。酒も、カシヤサを除いてよりどりみどり。壁に並んだ椅子ではときおり呵々大笑が炸裂し、若い娘が踊りに誘つてくれる男を待っている。扉が開け放たれ照明が煌々と灯された二階のサロンでは、紳士淑女がガブリエラのままみとデザートをほおばりながら、バイーアじゃこんな上品なパーティー見たことないわ、などと話している。

バタ克蘭のオーケストラがワルツ、タンゴ、フォックストロツト、軍隊ポルカを演奏していた。この晩、キャバレーで踊る人はいなかった。大佐、商人、輸出業者、商店の従業員、医者、弁護士みんながそこにい合わせていたからである。がらんしたキャバレーでは、女の子がひとりふたり待機していたが、結局だれも来なかつた。

ダンスホールでは老いも若きもひそひそ声で、あの服や宝石や装飾品はこのじゃないかとか、こっちのふたりはできてるにちがいないとか、あっちのふたりはくつつきそうだとか、そんな言葉を交わしあつていた。しかし、人目を惹き、スキャンダルの的になつたのは、バイーアから取り寄せたいちばんきれいな夜会服に身を包んだマルヴィーナだった。港口の調査にやってきた技師が既婚で、ただし妻とは別居していることをいまや町で知らぬ者はいなかつた。たしかに妻が精神病院に入つており、治癒の見込みがないことは事実である。だが、そんなことはどうでもよい。この男には結婚適齢期の独身娘に目を付ける権利などないのだ。娘に不名誉以外のなにを与えることができようか？ 娘はせいぜい世間の口の端に掛ければ、陰口を叩かれるのがオチ。だからといって結婚に辿り着くことなど決してない。とはいえ、ふたりはぴたりとくつついたまま、ダンスパーティーのなかでいちばん長く安定したカップルを組み、ワルツもポルカもフォックストロツトもなにひとつ飛ばすことなく踊り続けていた。ローム口は死んだオズムンドよりもアルゼンチンタンゴが巧かった。マルヴィーナは顔をバラ色に染め、眼差し深く、夢に包まれたように技師の逞しい腕に抱かれている。その姿は軽く、さながら飛ぶがごときだった。ささやき声が壁ぎわの椅子を走り、階段から沸き上がり、サロンに広がつてゆく。家の玄関でこっそり恋人たちと戯れているあの燃えるような小麦色の肌をした娘イラセーマの母親ドナ・フェリーシアは、娘にマルヴィーナとのつき合いを禁じていた。ジョズエー先生はカクテルを作り、声高に

話をして、ことさら無関心と快活を装おうとしている。音楽の音は次第に広場へと広がってゆき、グローリアの窓から入っていった。午後の式典に出席するため町にやってきたコリオラーノ大佐と寝ているグローリアの窓から。コリオラーノ大佐はダンスパーティーに足を運ぶ習慣がなかった。あんなあ若者のやるこった。おれのダンスパーティーはグローリアのベッドの中。そう考えていたのである。

ムンデイーニョ・ファルカンがダンスホールに降りてきた。ドナ・フェリーシアがイラセーマに囁く。

「ムンデイーニョさんがお前を見てるよ。ダンスに誘ってくれるわ」

母親は娘を半ばむりやり輸出業者の方に押し出した。イリエウス広しといえどもこんなに良いパートナーがいるだろうか？ カカオの輸出業者にして金持ち、政治的な領袖にして若い独身。そう、独身。結婚ができるのだ。

「お誘いしてもよろしいでしょうか？」とムンデイーニョが訊く。

「喜んで！」ドナ・フェリーシアが挨拶のために半ば立ち上がる。

たっぷりした肉付きのイラセーマが、媚態をつくってなまめかしくムンデイーニョにしなだれかかる。ムンデイーニョは娘の胸と腰が触れるのを感じ、優しく抱き寄せる。

「あなたはパーティーの花形だ！」

イラセーマはいっそうしなだれかかって答える。

「さみしかったの。だって、だれもわたしを見てくれないんですもの……」

ドナ・フェリーシアは椅子に腰掛けたままほくそ笑んだ。イラセーマは今年で修道女学校を卒業する。結婚できるときももう間近だ。

ラミーロ・バストスは午後の式典に代表としてトニコを差し向けた。もうひとりの息子アルフレードが議会の用事でバイーアにいた

からである。夜のダンスパーティーにトニコはドナ・オルガを同伴していた。オルガは若者向きのバラ色の服に自らの脂身をむりやり押し込んでいる。その姿の滑稽なこと！ 二人と一緒に一番上の姪が来ていた。うっすらと青い目、肌は真珠のように透き通っている。気取ってしゃちほこばったトニコは、女たちに目も遣らず、神とラミーロ大佐が妻として与えたもうた肉の山をあちこち引きずり回すことに専念していた。

ナシブはシャンペンを飲んでいた。プリーニオ・アラサーが悔しがって眩いたように、高い酒を消費して少しでも実入りを多くしようという魂胆ではなかった。苦しみを忘れたかったからである。始終つきまとう不安、昼も夜も苛む恐怖心を追い払いたかったのだ。ガブリエラを包囲する円は徐々に大きくなり、締めもきつくなっていた。伝言、プロポーズ、ラブレターが次々に送られてくる。比類なき料理人に驚くような賃金を、比類なき娼婦に家具付の家と店の贅沢品をすべて与えようというのである。

ほんの数日前だった。第四書記に選ばれたおかげでこの日ほど鬱いでいなかったときのこと。こうした連中がどこまでやるかよくわかる出来事が起こった。

鉄道会社の取締役ミスター・グラントの妻がナシブの家にやってきて臆面もなくガブリエラに話を持ちかけてきたのである。このグラントという男は一九一〇年からイリエウスに住む瘦せて無口な高齢のイギリス人だった。だれもがこの男を知っていて、たんにミスターと呼んでいる。妻は金髪の長身、自由にあふるまう男っぽい女性で、イリエウスに堪えられず、何年も前からバイーアに住んでいた。この妻がイリエウスに住んでいたころ、みんなの記憶に残っているのは、まだとても若かったその姿と、命じて鉄道会社の地所に作らせ、持ち主が去ってからは雑草が生え放題になってしまったテニスコートだけであった。バイーアではバーラ・アヴェニードにある自宅で大々的な夕食会を催し、自動車を乗り回し、葉巻をふか

し、真つ昼間から愛人たちを迎え入れていたらしい。一方、ミスターの方はイリエウスを離れなかった。地酒のうまいカシヤサをこよなく愛し、サイコロポーカーをやり、土曜になると決まって黄金のピンガで酔っぱらい、日曜には近くへ猟に出かける。庭に囲まれた美しい一軒家にインディオ女と二人で暮らし。あいだにはひとり子どももいた。妻は年に二三度イリエウスに姿を見せるが、そのさいには、偶像のようにまじめで物静かなそのインディオ女のところに土産を持ってくる。子どもはまだ六歳になったばかりだった。イギリス女がバイーアに連れて帰り、自分の子どものように教育を与えているのだった。祝祭日ともなるとミスターの庭の旗竿にはイギリスの国旗がはためく。グラントは、イリエウスの地にあつてもなお、麗しき女王陛下の国ブリテンの副領事なのである。

最近船を下りたばかりのイギリス女が、ガブリエラのことをどうやって知ったのだろうか？ 使いを遣つてバールのつまみと甘味を買つてこさせると、ある日、聖セバステイアン坂を上つて、ナシブの家の扉を叩いた。微笑む家政婦を矯めつ眇めつしばらく見たあとで言う。

「Very well!」

ストレートな女性だった。ぞつとするような噂が流れていた。男に勝るとも劣らないほどの酒豪。セミヌードで浜辺に行く。少年と違ってよいくらいの若い男に目がない。それどころか嗜好は同性にまで及んでいる。ガブリエラに持ちかけた話は、バイーアに連れて行つてイリエウスでは想像もできない給料を与え、エレガントな服を着せてやり、日曜には気晴らしをさせる、というものだった。回りくどいやり方はせず、直接ナシブの家の扉を叩いたというわけである。それにしてもイギリス女のなんと厚かましきよ……

それだけではない、今では判事も審理が終わると坂を上る習慣がついてしまった。ガブリエラに家を与え、妾にすることをどれだけ男が夢見ているか。もつと控えめな男たちでさえ、せめて一晩

でいいからガブリエラと散歩して、カップルが暗がりて怪しげなことをしている浜辺の岩の裏手に行きたいと思つてゐる。男たちは日ににずうずうしくなつていった。バールではガブリエラに小聲でささやこうと躍起になり、ナシブの家の前を行き交う男の数が増える。その噂はカウンターの後ろにいるナシブの耳にも届いていた。毎日午後になるとトニコがニュースを持ってきてくれるし、ニョー「ガールもますます危険が高まつてゐることを教えてくれる。」

「女はどいつもこいつもそろそろ限界にきてる。いちばん貞淑なやつでさえ……」

ドナ・アルミンダは例によつて霊がどうだとか偶然の巡り合わせだこうだとか言いながら、こんな魅力的な申し出を断るなんてガブリエラ、あんたはバカだと言ひ募つてゐた。

「ガブリエラが出てつたところで、ナシブさんよ、あんたどうせ気になんかしないんだろう？」

気になんかしない……どころか、ナシブはそのことしか考えていなかった。どうしたら良いか考えあぐね、夜も眠れず、昼寝もままならない。長椅子に横になつても、ついつい不安な気持ちを反すうしてしまふのだ。あろうことか、ついには食欲まで失せ、痩せ始めた。パーティー会場でお祝いの言葉を掛けられ、背中をポンと叩かれ、おめでどうの抱擁を受けても、胸に去来する不安と疑問を溺れさせるにはシャンペンに頼るしかない。ガブリエラはおれの暮らしにとつていったいどんな意味があるのか？ あの娘を手放さないためにどこまでやるべきか？ ナシブはジョズエーの鬱を道連れにした。ベルモットの海に難破した先生は、溺れながら怒つてゐる。

「この糞パーティーにやなんだつてカシヤサがねえんだ」

いつもの美しい言葉と律動溢れる詩もどこへやらである。ダンスパーティーの話話をさらつたこ出来事はさらにもう二つあった。ひとつめは、尻軽なイラセーマにたちまち飽きたムンディーニョが(ムンディーニョはキスや愛撫をもらいたいがために

家の玄関や昼間の映画館で口説くような男ではなかった)、真珠のように透き通った肌の青い目をしたブロンド娘の存在に気づいたことだった。

「だれだい、あれは？」と尋ねるムンデイーニョ。

「ラミーロ大佐の孫娘で、アルフレード博士の娘ジェルーザです」

ムンデイーニョは微笑んだ。面白いことでも思いついたらしい。娘はおじとドナ・オルガの隣にいる。まだ若くて美しい。

ムンデイーニョはオーケストラの演奏が始まるのを待ってトニコの方に行き、腕を掴んだ。

「奥さんと姪御さんにご挨拶させてくれないか」

トニコはどもりながら二人を紹介したが、やがて社交人としての落ち着きを取り戻した。二言三言社交辞令を交わすと、ムンデイーニョは若い方の女性に向かって尋ねる。

「ダンスはなさいますか？」

娘は微笑みながらこくりと頷いた。二人は踊り始めた。ホールは興奮に包まれ、二人を見ようとしてステップを踏み外すカップルもいた。ご婦人方の囁き声が大きくなり、階上からも人が見に降りてきた。

「すると、あなたですか？ 鬼のようだと噂の方は。わたしにはとてもそんな風には……」

ムンデイーニョは笑った。

「ただのカカオ輸出業者ですよ」

今度は娘の方が笑った。こうして二人の会話は続いた。

もう一つのセンセーションはアナベーラであった。キャバレー通いをしたこともなければ、アナベーラの踊りも見たことのないジョアン・フルジェンシオの思いついたアイデアである。真夜中にさしかかって宴もたけなわというところだった。ほとんどの照明がぱたと消え、ホールは闇に沈み込んだ。アタウルフォ・パッソスがアナウンスをする。

「かの有名なリオ出身の芸術家、踊り子アナベーラの登場です」

熱烈な拍手を送る若い娘やご婦人がたのために、アナベーラは羽とベールに包まれた踊りを披露した。リベイリーニョは妻のとなりで勝ち誇った顔をしている。パーティーに出席している男たちは、アナベーラのほっそりとした機敏な身体が自分たちだけのものだということを知っていた。自分たちのためには、メッシュも羽もベールもなしでアナベーラは踊ってくれるのである。

この出来事は、博士をして厳かにこう断言せしめた。

「巨人のような足取りでイリエウスは文明化しております。つい数ヶ月前までは芸術がサロンから閉め出されておりました。あの才能豊かな音楽と舞踏のミュージックがキャバレーに追放され、場末の吹き溜まりに亡命していたのです」

芸術を場末の吹き溜まりから掬い上げ、それを最も立派な家族のど真ん中に持ってきたのが商業会議所だった。ホールには割れんばかりの拍手が鳴り響いていた。

古いやり方

ムンデイーニョ・ファルカンはついにアルティノ大佐との約束を果たした。大佐の農園を訪れるという約束である。ただ、指定された土曜日ではなく、その一ヶ月後。しかも隊長にしっかりと促されてのことだった。収税吏はアルティノを征服することがきわめて重要だと考えており、もしこれがうまくゆけば、港口の調査が始まってもお態度を決めかねているかなりの大農場主の支持が得られると説得したのである。

技師の到着——すなわち州政府の敗北を意味する——が衝撃的であったこと、ムンデイーニョにとつてそれが一線を画する出来事であったことは間違いない。バストスが『日刊イリエウス』を焼くという暴挙に出たこと自体によく表れている。事件のあと幾日かは、

輸出事務所に現れてはムンデニーニヨに連帯を表明し、票の供出を確約する大農場主たちがいた。隊長は票数を紙に書き込み、それを足してゆく。政治的なきたりがいかに大きな支配力を持つかを知る隊長には、辛勝くらいではその先を望めないことが分かっていた。連邦議会や州議会の議員、行政長官や地方議会に認められるためには、圧倒的でダントツの勝利を飾るよりほかに手だてはない。そのためには連邦を舞台に商売を展開する輸出業者の友情と、メンデス・ファルカン一家の威光にすがるしかなかった。かなり水をあけて勝たなければならぬ。さもなくば一切は無に帰するだろう。

最後の事件のあと、事態は沈静化していた。少なくとも表面上はそう見えた。イリエウスのいくつかのグループでは、ムンデニーニヨ周辺にたいする親近感が増していた。新聞の焼き払い事件を目にして、人々はまた暴力の時代がやってくるのではないかと恐れていた。バストスが采配を揮っているかぎり、用心棒の時代は終わらないと見ていたのである。だが、こうした卸・小売業者、商店や問屋で働く若い店員たちが票のうえでなきに等しいことを隊長は知っていた。票は大旦那、とりわけ大きな農場を持つ大旦那たち、一地区をまるまる所有する地主、上流社会の仲間、複雑な選挙組織を牛耳る者たちの手に握られていたのである。すべてを決めるのはその人たちだった。

リオ・デ・ブラーソにあるアルティノ・ブランダン大佐の家は駅の脇にあった。ベランダがめぐり、壁は蔦に覆われている。庭にはとりどりの花と果物のなる木。ムンデニーニヨは驚いた。大佐はオープンな人でイリエウスではめずらしいタイプの大農場主だと隊長は言っていたが、なるほどその通りだと思つた。砂糖栽培のころの大邸宅に備わっていた快適さ、洗練、贅沢の伝統は、この地域ではすでに途絶えていた。開墾地や村落にある大旦那たちの家には、最低限の快適さすらないところが多い。大農場では杭の上に家が建てられ、その下に豚が眠っているか、さもなくば近くに豚小

屋があつて、殺人毒蛇から身を守ってくれている。厚い脂身よつて毒から守られた豚が蛇を殺してくれるのである。その暮らしぶりには暴力の時代からある種の質素さがあつて、それがあつたころまでイリエウスやイタブーナにも消え残っていた。大旦那たちが綺麗な住まいやバンガローちよとしたお城のような大邸宅を買つたり建てたりし始めたころにもまだ、その質素さは消えていなかった。質素な生活の習慣を捨て去るよう促したのはバイーアで大学に通っていたその息子たちであつた。

「足をお運びいただき、たいへん光栄です」と言いながら、大佐は妻を紹介した。そこは素晴らしい家具が置かれた応接室で、アルティノ大佐と若き日の妻の彩色した肖像写真が壁を飾っている。次いでムンデニーニヨは宿泊客の部屋に案内された。豪華な部屋だった。ふかふかのマットレスは羊毛で、シーツは亜麻、ベッドカバーには刺繍が施され、ラベンダーのかすかな香りが部屋全体に行き渡っている。

「もしよろしければ、昼食のあと馬に乗りませんか。開墾地の仕事を見ていただきます。夜は『アグアス・クララス』でお休みいただけます。翌日の午前中に川で水浴びいたします。そうしたらまた馬に乗って、今度は農場を見ていただきます。その場で野禽を料理して昼食。夕食までにはまたここに帰ってくるという予定でいかがでしょうか？」

「すばらしい。大賛成です」

アルティノ大佐の農園アグワス・クララスは広大な土地で村落に近く、少なくとも一レグア(四三五六ヘクタール)はある。アルティノ大佐はもつと遠いところにもうひとつ大農場を持っていて、そこではまだ処女林を開墾していた。

テーブルには皿が次々と運ばれてきた。川魚、まさざまな鳥、牛肉、羊肉、豚肉。だが、これはまだほんの家族用の昼食に過ぎなかつた。正式な招待による晩餐は日曜に予定されている。

夜になると農園では（その日ムンデーニヨは、農園労働者がまだ柔らかいカカオを採って桶に入れ、乾燥箱のなかで細かいステツプを踏むようにひっくり返しては日に当ててゆくようすを見学したのでった）灯油ランプの光をたよりに会話が弾む。アルティーノは用心棒シヤケンソウの起こした事件について話し、土地を征服したばかりのころの古い話を語った。農夫がなんにか地面に座って会話に参加し、話の細部をまた思い出している。アルティーノがひとりの黒人を指さして言った。

「こいつなんか二十五年前からわしんところにおりますよ。このあたりに逃げてきたんでね。それまではバダロー一家の殺し屋でした。殺めた人数分の罪をいちいち償っていた日じゃあ、こいつなんか一生かかっても終わりませんや」

黒人は白い歯を見せて笑った。噛みタバコを噛んでいる。掌には固いたこができて、乾いたカカオの蜜が分厚く足を覆っていた。

「大佐、わたしのことはどうお考えになつてゐるんですか？」

ムンデーニヨとしては政治の話をしたかった。金持ちの大農場主を味方に引き入れたかったからである。だがアルティーノはその話題を避けた。わずかに、『日刊イリエウス』が焼かれた事件に触れただけで、しかもリオ・デ・ブラソで昼食を食べているときだった。

「ありやまずい：完全に時代遅れの遺物です。アマンシオは義の人なんだが、じつに粗暴でねえ。いまだに生きてゐるなんて信じられません。抗争で三度も重傷を負つてゐるんですよ。片目も失つてゐるし、片腕も動かない。それなのにまだ懲りとらんのだから。メルク・タヴァーレスも冗談の通じない男でねえ。ジェズイーノはもちろん可哀想だが：罪を犯したら自由じゃいられんでしょう。ああなるしかなかった。だが、この期に及んで新聞に火をつけるなんて、どんな言い訳ができますか？ ありや本当にまずい！」

魚の背骨を取りながら、

「だが、失礼を承知で言わせていただければ、あんたの立ち振る舞いもうまくなかった。わしはそう思つとります」

「なぜでしょうか？ 新聞が大人しくなかつたからですか？ でも政治運動で敵に塩は送らないでしょう」

「あんたの新聞がしじゅういきり立つとるちゅうのは、まあそのとおりです。どの記事を読んでも面白い：漏れ聞くとところによると書いてるのは博士ドクトールだとか。あの人の才能たるや全イリエウス人が束になつてかかつてもかないませんな。じつに知的な方で：わしは好きですよ、あの方の話を聞くの。小さいな体躯に綺麗な声。まるでサビア鳥ですな。新聞については、おっしゃるとおりです。新聞ちゅうのは相手をこき下ろしたり、罵倒するためのものですから。わしもそう思つとりますし、新聞の購読契約までしました。その点を問題にしとるんではありません」

「では、なにを？」

「ムンデーニヨさん。新聞を燃したのは、ありやたしかにまずかつた。認められませんが、ぜつたいに。ただ、やつらが新聞を燃やしたのになぜあんたは手をこまねいていたのか？ ジェズイーノの場合と同じです。あの人はほんとうに妻を殺したのか？ そんなことはなかつたと思ひます。ところが妻に浮気をされ、恥をかかされた。そこで殺すしかなかつた。さもないと鶏舎の去勢鶏や牛車の牛より意気地なしと思われてしまうからです。あんたはなぜあいつらの新聞を燃やさなかつたんです？ 新聞だけじゃなくて、建物全体を。なぜ輪転機を壊さなかつたんです？ こんなこと言つてすまないが、あんたはそうすべきだった。さもないとただのお人好しと言われるのがオチです。イリエウスやイタバーナを支配するためには男振りを見せなくちゃいかん。相手に頭を下げちゃいかんのです」

「大佐、わたしが臆病者でないことは分かつていただけたと思ひます。でも、大佐ご自身もおっしゃつたように、ああしたやり方は

もう古い。過去のものです。わたしが政治に身を投じたのは他でもありません、あのやり方の息の根を止め、イリエウスに文明を根付かせるためなのです。それにそもそもどこで用心棒ジャクソンなんか見つけてきたら良いんです？ 手下なんて一人もいないのに……」

「そういうことなら……あなたには友人がおいでだろう。リベリーニョのような肝の据わったやつが。わしの方でも、ムンディーニョさんにも必要になるところがあるうと思つて何人か用意してます。遠慮なくおっしゃってください。お貸ししますよ……」

政治の話はそこで終わった。ムンディーニョはそれ以上どうすればよいか分からなかった。まるで大佐に子ども扱いされているような気分だった。玩ばれているような。開墾地でも夜になるとムンディーニョは政治の話しに持つてゆこうとしたが、アルティーノは頑として譲らず、カカオ話に終始した。リオ・ド・ブラソに戻る前には美味しい昼食が出され、アグーティ、パカ、シカなどありとあらゆる野禽の肉が供されたが、なかでもひととき美味い肉があった。ムンディーニョは、それがキンカジュウ猿の肉だと後で知つた。リオ・ド・ブラソの村では、大農場主、商人、医者、薬剤師、神父など地域の有力者があつたけ集まり盛大な晩餐会になつた。アルティーノはアコーデオオン奏者、ギター奏者、即興歌合戦の歌手たちを呼んでいたが、歌手のひとりには盲目で、恐るべき韻文の作り手であつた。薬剤師がムンディーニョに政治のことを尋ねようとしたときがあつた。ムンディーニョが答えようとする、とつぜんアルティーノが割つて入り、

「ムンディーニョさんはここに政治をなさりにいらしたわけではございません」と言うと、別の話を始めた。

月曜日、輸出業者は帰宅した。あのアルティーノ・ブランダン大佐はいったい何がしたいんだ？ スティーヴンソンとの取引を切つて、おれのところにカカオを売りに来た。二万アロバ以上だ。おれにとっては第一級の取引だ。大佐はバストス一族と表だつた約束

があるわけでもない。それなのに政治の話はしたがらない。おれがなんにも分かつていないのか。それともあのご老体が変わり者なのか。ご老体はおれが建物に火をつけて、輪転機を壊すことを望んでいる。ひよつとすると殺人までも……

隊長カピタンも、大佐たちが考えていること、生き方、行動の基準がまったくわからない、とはつきり言う。ただ、『日刊イリエウス』に火をつけるというあの愚劣な行為に対して『南部報知』に復讐するというアイデアについては、神妙な顔でこうコメントした。

「その点では、あの男も大間違いというわけじゃない。実はおれもそのアイデアは考えてたんだ。バストスの野郎どもに教訓が必要なのは間違いない。この土地の主人はもうお前たちじゃないということを知らしめなけりゃならないから。そのアイデアはここんとそろずつと考えてた。もうリベリーニョにも話してある」

「おいおい隊長カピタン、馬鹿なことは止めよう。暴力に対してはタグボートで、港口の浚渫船で応えようじゃないか」

「でもあんたの技師はいつたいつになつたら調査を終えて浚渫船を呼んでくれるんだい？ こんなにぐずぐずした奴見たことないぞ……」

「難しいんだよ。あと数日だ。あの人も一日中働いてくれている。寸暇を惜しんで。これ以上は急かせるのは無理だ」

「昼夜を問わずせつせとね」と言つて隊長カピタンが笑う。「昼間は港口、夜はメルク・タヴァーレス家の玄関だ。あそこの娘に惚れて、ひつついてるそうじゃないか」

「若いし気晴らしも必要だよ……」

リオ・ド・ブラソ訪問から一週間ほど経つたころのことだった。役員会を終えて発展クラブの建物から出たとき、ムンディーニョはアルティーノ大佐の後ろ姿を見かけた。場所はラミロー・バストスの家の近く。家の窓にはブロンド娘ジェルーザの姿もちらりと見え

た。大佐が帽子を持ち上げ、女が手を振ってさよならをしている。このようすを見ているうち、ムンディーニヨはなにかしら愉快なものを感じた。というのも、その前日、リベイリーニヨが自らの農園にほど近いグワラーシという集落からバストスの代理人で行政監督局の役人を追い出したからである。男はほうほうの体でイリエウスに戻った。棒でぼこぼこにされ、人から借りただぶだぶの服を着ていた。めった打ちに遭ったその晩、男は素足素つ裸で帰途に就かなければならなかったのである…

ソフレ鳥

ナシブはもうこれ以上堪えられなかった。心安らはず、陽気さは消え、生きる喜びも失せた。先をつまんでは丸めることを忘れてしまったため、髭は微笑みの消えた唇に元気なく垂れ下がっている。ナシブは年がら年中もの思いに耽っていた。ひとりの男を消耗させ、不眠と食欲不振に追い込み、痩せさせ、不幸と憂愁のどん底に陥れるこれ以上の方途はない。

トニコ・バストスはカウンターに身を乗り出して苦味酒を注ぎ、バールの主人の疲れた姿に皮肉たつぷりの目を向けた。

「えらく元気がないなあ。人が変わったようだぜ」

ナシブはがっくり肩を落としたまま頷いた。大きく見開いた目がエレガントな公証人にじっと注がれている。トニコにたいする信用は最近ナシブのなかで厚くなってきた。友情が途切れたことこそなかったものの、これまでつき合いは表面的で、売春婦の話をしたり、一緒にキャバレーに行ったり、何杯か飲んだり、といった程度だった。ところが最近、ガブリエラが店に顔を出すようになってから、二人の親しさにはこれまでになかった深みが加わった。食前酒をひっかけに毎日やってくる常連客のうちでトニコだけが、花を耳の後ろに花を挿してやってくるガブリエラにちよっかいを出

さなかつたのである。軽く挨拶をすませると、ご機嫌を伺い、料理の味付けをすばらしいと絶賛するだけ。流し目を送ったり、傍で囁いたり、手を握ろうとなんかしない。まるで、美しくて魅力的だが手の届かない貴婦人かのように敬意を以てガブリエラを遇していた。ガブリエラを雇ったときから、ナシブは手強い競争相手としてだれよりもトニコを恐れていた。トニコこそ並ぶ者なき女たらし、ドンファンだったではないか？

世の中とはかくも驚きに満ち、かくも謎に満ちている。あのトニコが、こんなに刺激的なガブリエラを前にして、最大限の慎みと敬意を失っていなかったのだ。アラブ人と美しい家政婦との関係はだれもが知っていた。しかも、ガブリエラは表向き料理女として雇われているだけで、二人の間にその他の契約が結ばれていないことは間違いない。それを良いことに男たちは、ナシブの目の前であっても、ガブリエラを甘い言葉で包み、蜜のようなセリフで塗りたくり、その手に付け文を握らせていた。最初のころ、ナシブは不愉快な気分で付け文を読むと、くしゃくしゃに丸めてごみ箱に投げ込んでいた。今では怒りに任せてビリビリ破く。付け文をする男はそれほど多く、なかには破廉恥な付け文まであった。ところがトニコはいつさいそんな真似をしなかった。ナシブにたいして真の友情を示し、まるで奥方か大佐の妻のように敬意を以てガブリエラに接していたのである。だが、これは本当に友情から出た行為、尊敬のしるしなのだろうか？ たしかにナシブは、コリオラーノ大佐のように、ガブリエラのことでトニコを脅迫することはない。ナシブが不満を抱かないただひとりの人物がトニコだったし、トニコにだけには、膿んだでも切開するように、苦しい胸の裡を打ち明けてもいた。

「最低だよ。どうしたらいいかわからないんだ」

「どうしたんだい？」

「わからないか？ 心の中から舐まれているんだよ。体が食いち

ぎらるような感じだ。気が変になる。このあいだだって手形を支払うの忘れちゃってさ。これだけでも分かるだろ、どんな状態か」

「情熱ってのは生半可じゃないよな……」

「情熱だって？」

「違うのか？ 愛こそこの世で最高にして最悪の代物だ」

情熱：愛：来る日も来る日も、昼寝の時間さえ、ナシブはこの言葉に抗っていた。自分の気持ちにどれほどの広がりがあるのか測りたくなかった。正面から事に向き合いたくなかった。自分はたしかに他人より少しは強くガブリエラのことを想っているし、執着だつてしているとは考えている。だが、恋がこんなに苦しいものだとはいぞ知らなかった。こんな嫉妬を感じたことも、こんなに相手を失う不安や恐怖に怯えたこともなかった。パールをここまで繁盛させてくれた、その魔法の手を持つ名高い料理女を失う不安と苛立ちではない。そんな不安はたちまちのうちに消え去り、もう頭の隅にも残っていないかった。そもそもナシブ本人の食指がまったく動いていないし、なにも食べる気がない；問題は、ガブリエラのいない夜、その熱い肌に触れない夜が想像さえできないことであつた。愛し合うことができない夜でも、ナシブはガブリエラの傍らに寝る。

するとガブリエラはナシブの胸に顔を埋め、丁字の香りが鼻腔に滲入してくるのだつた。そんな夜は欲望を抑え込むために眠れないが、抑え込んだものは、毎月繰り返されるさながら結婚初夜のような夜々ために蓄えられてゆく。この絶望的な情熱が愛でないなら、神よ、これをなんと呼んだらよいのか？ としてもしこれが愛なら、もしガブリエラなしで生きてゆけないとするなら、いったいどうしたらよいのか？ 「どんなに貞節な女だろうと、女ならいづれ我慢の限界がやって来るもんだ」と、ニコニコガブリエラはナシブに言った。いつも良い助言をくれる、もうひとりの友人だつた。ニコニコより図々しく、訴えかけるような眼差しをいつまでもガブリエラに投げかけはするが、その一線を踏み越えることはなかったし、プ

ロポーズもしない。

「そのとおりだ。なあトニコ。あの女がいなけりや、おれは生きていけないんだよ。捨てられたら気が狂う……」

「どうするんだ？」

「どうしたらいいもんか」ナシブの顔は見ていてつらいほどだつた。ふつくりとした頬いっぱい広がるあの陽気な表情はすっかり消えていた。縦に長く伸びた顔は陰気、いや不吉でさえある。

「あの娘と結婚したらどうだ？」友人の胸中に兆した考えを見透かすように、トニコはとつぜん言い放つた。

「冗談言うな。真面目な話だぞ……」

トニコは席を立つと、苦味酒のツケを帳面に書き込んで、シコモレーザにチップの硬貨を投げる。シコはそれを空中で受け取つた。

「でも、おれならそうするな……」

がらんとした店のなかでナシブは考え込んだ。他にどうしようがあるろう？ リゾレタにもそのほかの女にもうんざりして、慰みにガブリエラの部屋に通っていたところからずいぶん時が経つた。あのころは安物のブローチや廉価品のガラス指輪がその代価だつた。今では週に一度は贈り物をしている。服の布地、香水瓶、スカーフ、パールに置いてあるキャンディー。でも、こんなものがいったい何になる？ 相手は家具付の部屋を遣ると言っているのだ。働かなくて良い、豪華な暮らしをさせてやると言っているのだ。お店で好き放題に浪費し、金持ちの奥方たちよりも綺麗に着飾ったあのグロリアのように。相手を上回るなにかを贈らなければならぬ。判事の、マヌエル・ダス・オンサスの、そしてさらに今度は突然アナペーラに去られたリベイリーニヨの申し出をあざけることができなくなるものものを贈らなければ。踊り子のアナペーラはすでに立ち去っていた。この土地に恐れをなしたからだつた。行政長官の配下の者がぼこぼこにされた噂を耳にし、そこにリベイリーニヨが囁ん

でいたことを聞き及んで、もつと悪いことが起きそうな気配を感じたアナペーラは立ち去る決心をしたのである。密かに荷物をまとめ、バイアーノ号の乗船券をこっそり買い求めた。別れを告げたのはムンディーニヨだけだった。晩、家を訪ねると、ムンディーニヨが饑に百万レアルをくれた。リベイリーニヨはそのとき農園にいた。アナペーラ出立の知らせを聞いたのは町にやってきてからだ。大佐はダイヤの指輪とゴールドのペンダント、そして二千レアル以上の宝飾類を持って来ていた。パールでトニコが言う。

「これで、おれとリベイリーニヨ、ふたりとも男やもめつてわけだな。ムンディーニヨがそろそろ新しい女を見つけてくれてもいい頃合いだが……」

リベイリーニヨはガブリエラに梶を切った。住む家はもう用意できている。あとはガブリエラの気持ち次第。ダイヤモンドの指輪もゴールドのペンダントもガブリエラに贈るつもりだった。ナシブはこうしたことをすべて知っていた。ドナ・アルミンダが教えてくれたからである。そのときもナ・アルミンダはお隣さんを褒めちぎった。

「あんなに立派な娘は、あたしや初めてだよ……他の娘だったらとつとにイカレてるところだ。だれかが好きでなきやあはならなね。自分以上にだれかのこと愛してなきや。他の女の子だったらいまごろとつと居なくなつて、プリンセスみたいに贅沢に囲まれてるよ……」

ガブリエラの気持ちについては一点の疑念もなかった。ガブリエラはどんなプロポーズも、どんな贈り物も拒否しなかった。大したことじゃないと言わんばかりで、だれにでも笑いかけ、いささか凶々しいやつが手を握ろうとしても怒ったり、目くじらたてたりしない。付け文を突き返すこともなければ、突っ慳貪な態度を取ることもない。称賛の言葉には感謝の言葉で応じていた。ただし、誰の求愛も受け入れていなかった。ナシブにたいしても不満を言った

り、要求をつきつけたりせず、贈り物は嬉しそうに手を叩いて受け取る。しかも每晚飽くことなくナシブの腕のなかで燃え、再び力を取り戻しては「素敵な旦那さん」と呼びかけ、「あたし死んじゃう」と言っているではないか？

「でも、おれならそうするな……」か。他人事だから簡単に言うが、どうしてガブリエラと結婚できるっていうんだ？ あの娘はただの料理女だ。しかもムラータ、家族もいない。処女でもないし。そもそも「奴隷市場」でたまたま見つけただけの女じゃないか？

結婚というのは、才能があつて、家柄が良くて、嫁入り道具が揃つていて、教育があつて、一点の曇りもない処女とするものだ。もしガブリエラなんかと結婚したら、おじ、見栄っ張りのお婆、姉、農業技師で家柄の良い義兄がなんと言うか？ イタブーナを支配する土地の名士にして金持ちの親戚、アシユカール家がなんと言うだろうか？ ムンディーニヨ・ファルカン、アマシンシオ・レアル、メルク・タヴァーレス、博士、隊長、マウリーシオ先生、エゼキル先生、つまりパールの友人たちがなんて言うか？ 町の噂はどうなる？ 考えるだにナンセンスだ。バカバカしい。そう思いながらも、気がつくとなシブはガブリエラとの結婚のことを考えていた。

ある日パールに田舎から鳥売りがやってきた。鳥籠ではソフレ鳥「ソフレ」[Soft]は「苦しむ」という意味の動詞「ソフレール」[soffrir]に通じている」が優しく悲しい声で鳴いている。黒と黄色の美しい小鳥は落ち着かない様子でいつときも鳴き止まない。ますます大きくなるそのさえずりは、耳に心地よかつた。シコ・モレーザとビコフイーノがうつとりと聞き入っている。

ひとつだけ間違いないこと、それがこれから起ころうとしている。ガブリエラはもう二度と昼間店にこないだろう。パールにとつては損害だが、仕方がない……

お金は失うかもしれない。でもあの娘を失うよりはましだ。ガブリエラは男たちにとって日々の誘惑だった。そこにいるだけで夢中

にさせてしまう。ひとたびその姿を見た男がガブリエラを欲しいとも、愛したいとも思わず、恋い慕わずにいられようか？ ナシブは指先に、垂れ下がった髭の先に、太股に、足の裏にガブリエラの感触を思い出していた。ソフレ鳥はまるでナシブのために歌っているようだ。それほど歌声は悲しみに満ちていた。そうだ、ガブリエラにこの小鳥を持っていつてやろう！ バールに来るな、ということになれば、気晴らしも必要だろう。

ナシブはソフレ鳥を買った。これでもうあれこれ考える必要はなくなるし、あれこれ苦しむこともなくなるのだ。

籠の小鳥とガブリエラ

「ああ、なんてきれいなもの！」ソフレ鳥を見たガブリエラは歌うように言った。

ナシブは鳥籠を椅子の上に置いた。小鳥は外へ出ようとばたばたしている。

「きみにあげる…きつと友だちになつてくれるよ」

ナシブはさきほどから腰を下ろしていた。ガブリエラは裸足のまま床にしゃがみ込む。毛むくじやらの大きな手を取って、掌に接吻したが、その仕草に、ナシブはなぜか父親の故郷シリアの山岳地帯を思い出した。ガブリエラの頭を膝に抱き寄せ、髪の毛のなかに手を入れる。小鳥はひとたび鳴き止んだと思うとまたさえざりだした。

「いちどにふたつもプレゼントをくれるなんて…なんていい方！」

「ふたつ？」

「小鳥でしょう、そしてもつと嬉しいのはそれを持ってきてくれたこと。だって旦那さん、毎日夜遅くならないと帰らないんだもん…」

ナシブはガブリエラを失い始めていた…「どんなに貞節な女だろ

うと、女ならいずれ我慢の限界がやって来るもんさ」どの女にもそれなりの価値がある、とニョーIIガールは言いたかったのだろう。ナシブの顔には苦渋の色が現れていた。それに気づいたガブリエラはナシブを見上げるとこう口にした。

「ナシブさん、悲しそうな顔してるわ…お変わりになつて…前はいつも楽しそうに笑ってたのに。それがこんな悲しそうな顔をして。ナシブさん、どうしたの？」

この娘に本当のことなど言えるだろうか？ きみを永遠に手放さないために、永遠に失わないためにどうしたら良いのが分からないだなんて。この機会に、毎日バールにやってくるというやり方を話題にしよう。

「ちょっと話したいことがある」

「うん、話して、旦那さん」

「ひとつまずいと思うことがあつて、気になつてるんだ」

ガブリエラはびっくりした。

「お料理、ひどいですか？ 洗濯物がだめなのかしら？」

「いや、そういうことじゃないんだ」

「じゃあ、なにが？」

「バールに来てくれるだろ？ あれが嬉しくない、というか気に入らなくて…」

ガブリエラは目を見ひらく。

「お手伝いしようと思つて、料理が冷めないようにつて。それで行つてるんです」

「分かつてるよ、ぼくは。でも分かつてないやつがいて…」

「そういうことですか。考えたこともありませんでした…あたしがバールにぐずぐずしているのがいけないのね？ みなさんにとつて不愉快なのね？ 料理女なんかバールにいると…考えてもみませんでした」

ナシブはご都合主義的にこう答えた。

「そういうことだ。気にしないのもいるが、文句を言うやつもいてね」

ガブリエラの目が悲しみに沈んだ。ソフレ鳥が胸も裂けよと鳴いている。心を引き裂くようなさえずりだ。ガブリエラの目は深い悲しみに沈んでいた。

「あたし、なにか悪いことでもしましたか？」

なぜおれはこの娘を苦しめる？ どうして本当のことを言わない？ じつは焼き餅を焼いている、ほんとうはきみが好きなんだ、となぜ打ち明けないんだ？ 胸のなかでいつも呼んでは楽しんでるピエという愛称でどうして呼んでやらない？

「じゃあ明日からこうします。店には裏口から入って料理を運ぶだけ。ホールにもテラスにも出ていきません」

それ以外にうまい方法があるだろうか？ こうすればお昼にもガブリエラに会って一緒にいられるし、手や腿や胸に触れることもできる。それに、こうしてガブリエラが半ばいなくなれば、気をそせろうとしてうまい話を持ちかけたり甘言を弄してきた輩も気が殺されるだろう。

「ボールに来るのは楽しいか？」

ガブリエラはこっくり頷いた。それは自由な散歩の時間だった。なんて楽しいひとときだろう！ 弁当箱を手には太陽の下を歩く。テーブルのあいだを歩いて、人の話に耳を傾ける。想いのいっぱい詰まった視線を体を感じる。老人はいやだ。大佐たちは家具付の部屋を買ってくれるというけれど、あれはいや。見られて、ちやほやされて、欲しがられる感じが好き。夜のための準備をしているように、欲望の空気に包まれているように。ナシブの腕の中でよくイイ男たちの姿を思い浮かべたものだ。トニコさん、ジョズエーさん、アリさん、店員のエパミノンダスさん。でもこのなかにナシブに告げ口をした人がいるんだろうか？ いやそんなはずはない。きつとあの醜い老人たちのひとりだろう。あたしに振り向いてもら

えなかつた腹いせに。

「わかつた。じゃあいいよ。おいで。でも給仕はしなくていい。カウンターの後ろに座っててくれ」

それなら見たり、微笑んだりくらいはできる。しゃべりたい人がいればカウンターに来ればいい。

「戻らなくちゃ…」とナシブが言う。

「こんな早く…」

「来るつもりもなかつたんだが…」

ガブリエラの腕がナシブの脚に巻き付いて放さない。昼間にガブリエラを抱いたことは一度もなかつた。それはいつも夜の営みだった。ナシブは立とうとした。ガブリエラが引き留める。黙つたまま、感謝の気持ちを伝えるように。

「おいで…こっちに…」

ナシブはガブリエラを引きずって行った。自分の寝室の、自分のベッドで抱くのは初めてだった。まるでガブリエラが料理女ではなく、妻であるかのように。キャラコの服を脱がせる。魅力的な裸体、うつつすらと湿った尻、固く張った乳房がベッドの上を転がり、ガブリエラがナシブの頭を押さえて臉に接吻をしたとき、ナシブは訊いた。初めて発する言葉だった。

「訊きたいことがあるんだけど、ぼくのこと好きか？」

ガブリエラは小鳥のさえずりのように一回だけ笑った。

「すてきな旦那さん…好きで好きで困っちゃう…」

ボールに行く行かないで悲しい思いをしていたガブリエラ。この娘を苦しませることなどできようか？ 本当のことを言わずにいられようか？

「きみがボールに来ていることに文句を言いやつなんかいなかった。来て欲しくなかつたのはじつはぼくなんだ。落ち込んでいる原因はそれだよ。みんながきみに話しかけるし、馬鹿なことを言う。手を握ろうとするどころか、むしゃぶりついて床に倒さんばかりの

やつまで……」

ガブリエラは笑った。愉快だった。

「そんなことどうでも良いの……気にしてないよ……」

「ほんとうに？」

ガブリエラはナシブを引き寄せ、乳房の谷間に押しつけた。ナシブは「ビエ……」と囁く。そしてガブリエラを掻き抱きながら、愛を語るときに決まって使うアラビア語でこう言った。「今日からきみはビエだ。そしてこれがきみのベッド。ここで寝なさい。料理を作っている料理女じゃない。きみはこの家の女主人、太陽の光、月の明かり、小鳥のさえずりだ。名前はビエ……」

「ビエって外国人の名前でしょ？ ビエって呼んで。その言葉でもっと話しかけて……あたし聞いているの好き」

ナシブが店に戻ると、ガブリエラは鳥籠の前に腰掛けた。ナシブさんて良い方。焼き餅焼いているのね。笑いながら鳥籠の格子のあいだに指を入れる。小鳥は怯えて逃げ回る。焼き餅なんて、かわい……ガブリエラは嫉妬をしたことがなかった。ナシブが気まぐれを起こして他の女の子と寝ていそうなどきでも。事実、最初のころはそういうことがあったし、ガブリエラも知っていた。自分の他にも別の女と寝ていようとかわまない。そういうことだ……であるだろう。でもその女とはずっと一緒にいるわけじゃない、ただ寝るだけだ。ナシブさん、焼き餅焼いているのね、かわいい。ジョズエーが手を握ってきたからってそれがなんなのかしら。あのイケメンのトニコさんなんか、ナシブのいるところじゃあんなに真面目な顔しているくせに、あたしの横にくるとすぐ首にキスしようとするんだから。でもそれがなんだっていうの。エパミノンダスはデートしようと言ってくるし、アリスさんはキャンディーくれたり顎を撫でたりするけど、だからどうだっていうの。ガブリエラはナシブの腕のなかでこの男たちと、いや、他にもおじ以外の男たちと、夜ごと寝ていたのである。今日はこれ、明日はあれというように。でもいちば

んたくさん寝ていたのは若いベビーニョとトニコだった。二人ともとてもステキだった。もつとも想像するだけでじゅうぶんだが。

パールに行つて、男たちのあいだを歩くことはそれほど楽しかった。人生は素晴らしい。生きていて、それだけでいい。陽の光を浴びて、冷たいシャワーを浴びる。グアバをかじり、マンゴーを食べ、ピーマンにかぶりつく。通りを歩き、歌を歌い、若い男と寝る。他の男と寝る夢を見る。

ビエ。ガブリエラはこの名前が気に入っていた。こんな名前を言えるのだから、ナシブさんが大した人だからだな。今だって外国語を話してたし。それなのに焼き餅なんか焼いて……おっかしい。ナシブさんを怒らせないようにしよう。とっても良い人だもん。気をつけて、悲しませないようにしなくちゃ。でも、家から出ないでいられるかなあ。窓にも顔をださないで、通りにも出ないで、口を閉じて、にこりもしない。そんなことできる？ 男の人たち弾んだ声にも、目の輝きにも触れずにいるなんて。「そこまで責めないで、ナシブさん。あたしにはできない」

小鳥が鳥籠にぶつかっている。何日まえからここに居るのかしら。そう前からじゃないわね。まだ鳥籠に慣れていないもん。ガブリエラは動物が好きだった。猫、子犬、雌鶏、どれとでもすぐに友だちになれる。田舎では鸚鵡を飼っていた。喋る鸚鵡。おじよりも先に飢え死にしまった。小鳥を鳥籠に入れておくの好きではなかった。見ててつらくなる。ただ、気を悪くさせるといけないから、そのことはナシブには言えなかった。家にいてもらうせめてもの慰めにと、歌を歌うソフレ鳥をプレゼントしてくれたのだ。小鳥のさえずりも悲しいけれど、ナシブさんも悲しんでるんだから！ 不愉快にさせないよう、気をつけなくちゃね。あの人を傷つけないから、小鳥は逃げたことにしよう。

ガブリエラは窓辺に行くと、グアバの木の前で鳥籠を開けた。猫が寝ていた。ソフレ鳥は飛び立つと、グアバの木の枝に止まってひ

としきりさえずる。さつきより明るく陽気な声になっていた。ガブリエラは微笑む。猫が目を覚ました。

背もたれの高い椅子

鍔で皮に型押しされた、背もたれの高い、オーストリア製の黒いどっしりしたそれらの椅子は、どうやら座るためではなく、目で見て感心してもらうために置かれているらしい。アルティノー・ブランドン大佐でなくとも、訪れた者ならだれしも威圧されたにちがいない。大佐は立ったまま部屋を眺め、驚きを新たにしていた。壁には、いかにも自宅らしく、ラミーロ大佐と今は亡き令夫人の彩色した肖像写真が鏡をはさんで飾られている。その写真は今をときめくサンパウロの会社が製作したものだ。部屋の隅には諸聖人が置かれた壁がながうがたれ、ロウソクの代わりに小電灯が赤、青、緑のきれいな光を灯している。反対側の壁には竹でできた日本の小さなゴザが吊られ、絵はがき、親類縁者の肖像写真、彩色画が貼ってあった。突き当たりのピアノには、血のように真っ赤な枝葉模様の黒いシヨールが掛けられている。

アルティノーは通りかかったジェルーズに挨拶をすると、ラミーロ・バストス大佐がいらつしゃつたら少々お時間をいただけないだろうかと尋ねたのだ。ジェルーズは、通りに面したふたつの居間を分ける廊下で大佐を通した。そこからだと徐々に活気づく家の物音が聞こえる。窓のかんぬきを外す音。椅子からカバーを取る衣擦れの音。ほうきやはたきの音。その広間はお祝いの日くらいにしか使われることがなかった。大佐の誕生日、新しい行政長官の就任、バイーアの重要な政治家を迎えるときなどである。偉い人が突然やってきたときにも開けられることがあった。ジェルーズが扉を開け、大佐を招き入れる。

「どうぞお入りになって、大佐」

大佐がラミーロ・バストスの家に来ることはめつたになかった。ほとんどいつもお祝いのときだけ。居間の豪華さに驚きを新たにしていた。バストス大佐の富と権力をまざまざと示している。

「おじいちゃん、すぐ来ますので…」と言つて微笑むと、ジェルーズはペコリとお辞儀をして部屋を出た。「綺麗な子だ。ブロンドで、肌など透き通つて青いくらいに白い。まるで外国人のようだ。あのムンディーニョ・ファルカンときたらなんたるマヌケよ。すべて簡単に解決できるというのに、なんであんなに喧嘩を売るんだらうか」

ラミーロの蹙音が聞こえてきた。アルティノーは腰を上げる。

「これはこれは、なんとなんと。ご来駕の栄光を賜りましたのはなにゆえのことか」

二人は手を握りあつた。アルティノーは老人の変わり果てた姿に驚いた。最後に会つてからのこの数ヶ月でずいぶん弱ってしまったものだ。以前は、年齢に負けない木の幹のように、風雪に耐え、イリエウスの土地にしっかりと根を張つて、未来永劫力を及ぼしそうな勢いだった。ところが、かつての威風堂々とした姿から残っているのは今や支配者の眼差しだけ。手はかすかに震え、背は曲がり、足どりもおぼつかない。

「ますますご勇健のごようす」とアルティノーが心にもないことを言う。

「まあなんとかやつとります。どうぞおかけください」

椅子の背もたれは真っ直ぐだった。見た目には良いが、座りにくい。ムンディーニョの事務所の青い皮製のひじかけ椅子の方が良かった。詰め物がしてあつて、座ると身体が柔らかく沈み込む。あまりに心地よいので、なかなか立ち上がつて暇乞いをする気が出ない。

「こんなことを伺つて申し訳ないが、おいくつになられましたか？」

「じき八十と三になります」

「良いお歳ですなあ。まだまだこれからでしょう」

「長生きの家系でしてね。祖父が亡くなったのは八十八。父が九十二です」

「お父上のこと、覚えておりますよ」

ジェルーズがトレイにコーヒーを載せて入ってきた。

「お孫さんもすっかり大きくなられて…」

「わしは結婚が遅くて。アルフレードもトニコも同じようなものです。さもなきやとつくにひまごがおるんですが。やしゃごがいてもおかしくない」

「ひまごさんももうすぐですよ。こんなに美しいお孫さんがいらつしゃるんですから…」

「そうですねあ」

ジェルーズがまたやってきて、コーヒーカップを片づけると、伝言した。

「おじいちゃん、いましてがたトニコおじさんがいらつしゃって、同席して良いかって」

ラミーロはアルティーノを見る。

「いかがでしょうか？ 二人だけの方がよろしいですか？」

「トニコさんならいらつしゃってもかまいませんよ。息子さんですから」

「来るように言ってくれ…」

トニコがやってきた。チョッキにゲートルという出で立ち。アルティーノは立ち上がり、友情の熱い抱擁を受ける。「このフンコロガシ野郎」、と心の中で大農場主は思った。

「しかし大佐、こうして自宅でお目にかかれるなんて嬉しいじゃございませんか。あまりお見えになりませんが…」

「わしは田舎の人間でして、リオ・ド・ブラソを出るのは拠所のない用事があるときだけです。アーグア・クララスに行くとか、そんなときくらいしか…」

「今年は、大佐、収穫が良いでしょう？」とトニコが割ってはい

「なんとも神様のおかげですな。こんなに大量のカカオを見るのは初めてです…ところで、イリエウスに来てみて決心がつきました。ラミーロ大佐を訪ねて、今考えていることをお話ししてみようってね。田舎では夜になるとものを考えるしかやる事がございませぬ…ラミーロ大佐もご存じだと思いますが、考え始めると、次にはそれを口にしたくなるものでして」

「とつくりとお聞きしますよ」

「ご存じのように、わたしは政治というやつに首を突っ込むつもりはございません。ただ一度だけ止むに止まれぬ事情がございまして。覚えておいでだと思いますが、フィルモさんが行政長官をなさっていたときのことです。リオ・ド・ブラソのことに首を突っ込むとして、勝手に官憲を任命した。そこでこの一件についてお話しするため大佐のところへ参った。そういう次第でした」

ラミーロは一件を思い出した。配下の警察署長が、アルティーノの子分だったリオ・ド・ブラソの警察副署長を解任し、その後釜に軍警の隊長を据えたのである。アルティーノがイリエウスに現れ、ラミーロの自宅に押し掛けて抗議した。かれこれ二十年前の話である。アルティーノは隊長の配置換えと子分の復職を要求し、ラミーロは解決を約束した。この解任・交替事件は、当時バイーアの上院で議員をしていたラミーロに相談も了承もなく行われたものだった。

「すぐにでも隊長に電話を入れておきます」とそのときラミーロは約束した。

「いや、それには及びませぬ。いらつしゃったその電車でお帰りになりましたから。どうやら降りるのが怖かったようですね。なぜかはよく分かりますが。詳しいことを聞いとりませぬので。なんでも、若い衆が隊長にステキなことをしようとしたらしいとか。

もう戻って来る気にはなれないでしょう。こちらとしてぜひお願いしたいのは、隊長の任を解いて、わしの友人をもう一度ポストに戻してもらふことです。力のない警察などなんの価値もありませんから……」

そしてその通りになった。ラミールはそのときのやつかいな会話を思い出した。アルティノは絶交と、相手方への支援を楯に脅してきたのだ。今度はなにが望みなのか？

「今日また参りましたのは、なにもお呼びでないところにこちらから首を突っ込もうというのではございません。だれかから説教を頼まれたわけでもない。ただ、イリエウスであれこれ起こっていることをつらつら田舎で考えておりました。こちらが事に首をつっこまなくとも、事の方から首をつっこんでまいりますからなあ。政治の経費は結局ほかならぬ大農場主たちが払うわけですから。田舎でカカオを取獲しとるわれわれ大農場主が。実は心配なことがございまして……」

「現状をどうお考えに？」

「ひどい、と思っております。大佐は相変わらず尊敬されておりますし、もう何年も前からこの土地の政治的領袖でいらつしやる。当然のことです。だれに否定できましよう？ このわたしに？ 滅相もない」

「ところが否定するやつがおるんですよ。この土地の人間ならまだしもだが、よそ者がひとりイリエウスのことに首を突っ込んでおる。理由はだれも知りません。そいつの兄貴たちは義の人ですから、自分たちの会社から弟を抛り出しました。背教者の面が見たくなかつたんですな。ところがそいつがここにやって来て、まとまっているものを引き離し、一緒のものをバラバラにしようとしておる。隊長が戦いを挑んでくるのはよく分かります。わしはあいつの父親と戦って、政府から追いましめたからな。それなりの理由がある。というわけで隊長とは決して仲違いしようと思つたことも、

あの人に対する敬意を捨てたことありません。だが、あのムンディーニヨ氏は金儲けのことだけ考えとればよろしいんじゃないでしょうか？ どうしてああ口出ししてくるのか？」

アルティノはトウモロコシの葉で作った葉巻に火を点け、壁がんの諸聖人を飾る電球を見つめている。

「最高級の電飾ですな。うちにも諸聖人がありまして、妻が熱心に祈りを捧げておりますが、ロウソクの減り方が半端じゃないんですよ。うちにもこんな電飾を置かせましょう。ところで大佐どの、イリエウスはよそ者が作つた土地です。他ならぬわたしらはどうでしょうか？ ここで生まれた者などひとりもおらんでしょう。この土地出身でひとかどの人物などおりますか？ 学識のある博士を抜かせば、残りはどれもこれもみんなクズです。わたしらは言つてみれば第一級のグラピウーナ（奥地人が都市生活者のイリエウス人につけた綽名）ですよ。子どもたちの代でやつと本物のイリエウス人というわけですな。この恐ろしい土地にやってきたとき、わたしらだつてまだよそ者でしかなかつたんじゃないか？」

「なにも怒らせようと思つてお話し申し上げたわけではございません。あなたがあの男にカカオを売っていること、実は今回初めて知りました。お二人がご友人だなんて存じ上げませなんだ。ご友人とわかりましたので、それならと言わせていただいた次第です。ただし、今申し上げたことを引つ込めるつもりはない。前言撤回はいたしません。あの男とあなたは違うんですよ、大佐。あの男とわしは違うんです。わしらはなにひとつない土地にやってきたわけで、あの男とは事情が違います。いくど命を落としかけたことか。もつと悪いことにな、他人の命を奪うためにビットマンを送り出さなければならなかつた。こうしたことには何の価値もないというんでしょうか？ あいつとあなたが同じだなんて思っちゃいかん。あいつとわしと同じだなんて考えちゃいかんのです」意欲を振り絞つていいうちに、老人の声からは震えが消え、かつてしきりに命令を下

していたときの決然とした調子が戻ってきた。「あの男は命を危険に晒したことがありますか？ お金と一緒に船を下りてきて事務所を開き、カカオを買って輸出する。このどこに命がかかっています？ やつのどこを探したらこの土地を支配する権利が見つかるのでしょうか？ わしらはその権利を自らの手でつかみ取ったんです」

「なるほど仰るとおりです。そのとおりですが、なにしろ時代が変わりました。わたしが日々の重労働に追われてうかうかしているあいだに、時は流れ、物事は大きく変わってゆきます。ふと目を上げて辺りを見回すと、なにもかもが様変わりしている」

トニコは黙って耳を傾けている。居間に来たことを半ば後悔していた。廊下ではジェルーザが使用人に指図している。

「どこが変わったと仰るんですか？ 仰ることがよくわかりませんが……」

「ではお話しいたします。以前なら命令することは簡単でした。力があればそれでよかったです。支配するなんぞ容易な話でした。今日、状況は一変しております。お話しになられたように、流血のすえにね。かつては土地の所有を確実にするために相手に勝つ必要があった。しかし、その必要をわたしらはすでに成し遂げてしまいました。おかげですべてが成長しました。イタブーナはイリエウスのように大きくなった。ピランジ、アグワ・プレータ、マクーコ、グワラーチも今や町になろうとしています。いたるところに博士が、農学者が、医者が、弁護士があふれております。みんなそれぞれに要求がある。それでもまだわたしが支配権を振るると、振るってよいとお考えですか？」

「こんなに博士がいて、こんなに発展する土地に成長できたのはなぜですか？ だれがそうしたんですか？ あんたでしょう、大佐。そしてあなたの配下のものたちでしょう。よその者ではありません。そしてそうである以上、これを成した人間を攻撃できる権利

がよそ者にあるでしょうか？」

「わたしらはカカオを植え、注意深く育てます。カカオの実を収穫すると割って桶に入れ、乾燥箱か室で乾燥させると、今度はロバの背に載せてイリエウスに持ってゆき、輸出業者に売りさばく。乾燥した、香り立つカカオ。世界最高の品です。たしかにこれを作っているのはわたしらだ。だが、わたしらにチョコレートが作れますか？ 作り方すら知らんでしよう。そのためにはウーゴ・カウフマンさんが遠いヨーロッパからいらっしやらないかな。それだつてまだカカオを粉末にするだけです。大佐。大佐はすべてをお作りになりました。現在イリエウスが持っているもの、現在のイリエウスの価値は、すべて大佐の力によるものです。それを否定するなんてとんでもない。まずこのわたしが許しません。しかし、大佐はできること、やれることをすですべてをなさいました」

「イリエウスはわたしが作ったもの以上に何を求めているのでしょうか？ これ以上なにかやれねばならんことがあるんでしようか？ 正直に言つて、そこらへんのことかわしにはとんと分らないのです。これとこれが必要だと大佐にはつきりご指摘いただかないと」

「すぐにでもお分かりになりますよ。イリエウスは庭園よりも美しい。でも、ピランジはどうでしょう？ リオ・ド・ブラソは？ アグワ・プレータは？ 人々はそれを求めているんです。それを要求しているんです。わたしらは農園労働者と用心棒ジャクソンを使って小道を拓きました。でも今必要なのは幹線道路。用心棒ジャクソンには造れませぬ。なんととっても最悪なのが港口。あのやつかいな港問題ですな。ラミーロ・バストス大佐はなぜあれに反対の立場をお取りになるんですか？ 州政府の要請があるからでしょうか？ ここじやだれもが望んでいることなのに。この土地にとっちゃまさに偉業ですよ。もしここから直接世界じゅうにカカオが輸出できたら。そうしたらわたしらもバイーアまでの貨物代を払わないで済む。費用を負担

しているのはだれですか？ 輸業者と大農場主です」

「人には約束ちゆうものがあります。それぞれ果たさなければならぬ約束ちゆうものがある。なぜ約束を果たさなければならぬか。尊敬を失うことになるからです。わしはこれまで約束を守ってきた。それはあんたも存じでしょう。州知事が頼んできて、ご説明くださいました。息子の世代が港を造ることになります。港口の外のマリヤードに。なにごとにもタイミングというものがあ

るわけで」

「今こそそのタイミングなんです。大佐はお気づきになられたくない様子ですが。わたしらの若いころは映画館もなかった。風俗も今とはすっかり違っておりまして。それ以外のことも今すべてが変わりつつあります。あまりの変化に、どっちへ顔を向けて良いかも分かりません。かつて土地をまとめるには命令を出し、州政府との約束を守ればそれで十分でした。今、それでは足りません。大佐は州知事との約束を守っていらつしやる。知事が大佐のご友人だからです。それでは、大佐に対する敬意が増すことはありません。そんなことを知って嬉しい人などおらんでしょう。みんなが望んでいるのは、必要なことに耳を傾けてくれる政府です。ところで、ムンディーニヨさんが人々を分裂させるのはいったいなぜか？ あの人の味方する者がたくさんいるのはいったいなぜなのか？」

「それはだな、あいつが人と金をばらまいて買収しているからですよ。それから、自分の約束も守れないような恥知らずを手下にして

いるからだ」

「申し訳ないが、大佐、そうじゃないんです。あの人にばらまけて大佐にばらまけないものがございますか？ 選挙の勝利、影響力、任命権、威信。どれを取っても大佐の方が上だ。あの人が提供できること、今まさにやっていることといえただただひとつ、時代と歩調を合わせて舵を取ることだけです」

「舵を取るって？ いつから選挙に勝ってるっていうんだ？」

「選挙に勝つ必要ありません。浜辺に道を通し、新聞の立ち

上げに資金を提供し、バスの購入を援助し、銀行の支店を持つてきて、港口のために技師を呼んだ。これが舵取りじゃなくてなんでしょうか？ たしかに大佐は行政長官、警察署長、村の役人に命令を出してはいます。しかし、しばらく前から舵を取っているのはムンディーニヨ・ファルカンです。そのためにわたしはここに参りました。土地に舵取りがふたりいては困りますから。片田舎からわざわざ出てきたのも、そのことをお話しするためです。このままこの状態が続くとまずいことになる。いやもうなり始めてます。大佐は人に命じて新聞に火をつけた。グワラーシでは大佐の手下が殺されかけました。わたしらの時代だったらそれも仕方ない。他にやりようがありませんでしたから。でも今そんなことをやったら身の破滅です。それをお話ししようとお宅の扉を叩いた次第です」

「わしに何を言いに来た」

「事態を丸く収めるにはたつたひとつしか方法がないことをお伝えしようとして参りました。たつたひとつだけ。いまのところ別の方法は見つかりません」

「それを言いに来たのか？」大佐の声がつつけんどんになる。今やふたりは仇同士のように相対していた。

「大佐、あなたはわたしの友人です。この二十年、あなたに票を投じてきました。その代わりに求めたものなどございません。お願

いしたのはただの一度だけ。それもこちらに理があつてのこと。あくまで友人として参った次第です」

「感謝いたします。続きを」

「ひとつだけ解決策があります。和睦なさることです」

「だが？ わしが？ あのよそ者と？ わしをいっただれだとお考えかね、大佐。若くて命がけだったときも和睦はしなかった。わしは誠実な男だ。その男に、もうすぐ棺桶ゆきのこの歳になつてから膝を屈しろと？ 冗談はよしてくれ」

だがここでトニコが割って入った。和睦というアイデアが気に入ったのだ。数日前、ムンデイーニヨはアルティーンノの農場に行ったという話だ。きつとムンデイーニヨの方から和睦の提案があったのだろう。

「おやじ、まず大佐の話を知りたくないの。友人として来てくださったんだから。受け入れる受け入れないは別にして」

「港口の件でなゼリーダーシップをお取りにならないんですか？ ムンデイーニヨを自分の陣営に引き込まれたら良いのに。イリエウスに恨む人間などだけひとりおりませんよ。隊長を含めて。でももしこのままで行くと、大佐はきつと負けます」

「大佐、なにか具体的な案はございますか？」とトニコが訊く。

「これといった案はありません。ムンデイーニヨさんとは政治の話をしたくないものですから。だが、解決策はたったひとつ、和睦しかないとお伝えはしましたが」

「で、向こうは何て？」と身を乗り出してトニコが訊く。

「まだ何も。もつとも、こちらでも返事を要求しているわけではありませんが。でも、もしラミール大佐に和睦を受け入れる準備がありなら、向こうが受け入れないなんてことがありますか？ 大佐が手を差し伸べれば、向こうだって断ることはできないでしょう」

「なるほどそうかもしれませぬ……、と言ってトニコは重い椅子を引き、アルティーンノ大佐のそばに寄る。

ラミール・バストス大佐のうわすった声が割って入った。

「アルティーンノ・ブランドン大佐。ご用件がそれだけなら、お話しはここまでということに……」

「おやじ、なんてこと言うんだい」

「お前は黙つとれ。わしに祝福をもらいたければ和睦のことはどうぞ忘れなすてください。大佐、申し訳ない。お気持ち害するつもりはないんだが。これまでもお力添えいただいてきたわけで

すし。この家ではお好きになさってけつこうです。もしよろしければ他の話をいたしましょう。ただし和睦の話だけはいたしません。よろしいですか？ わしはたったひとりになつても、息子たちがわしを捨ててあのよそ者と連んでも、友人がひとりもいなくなつてもかまわない。まあ、あのアマンシオくんだけは決してわしを見捨てることのないから、ひとりはおるわけですが。たとえみんなにそっぽを向かれることになつても、わしは和睦をしない。わしの目の黒いうちはだれにもイリエウスに指を触れさせません。昔役立ったやり方は今でも使えます。たとえ武器を手に死ぬことになつても、またもや人を殺す命令を出すことになつても——神よ、お許しください。一年後には選挙です。大佐、わしは絶対に勝ちますぞ。たとえ全員にそっぽを向かれても、イリエウスがまたもや無法者の巢になつても、盗賊の土地になりさがつても」と言ううち椅子から立ち上がり、震える声をいつそう荒げて言う。「わしは絶対に勝つ！」

アルティーンノも立ち上げると、帽子を取ると言った。

「わたしとしては喧嘩をするためにやってきたわけではございませんが、どうも聞く耳をお持ちでないようすな。敵としてお宅を後にするのは本意ではございません。大佐を深く尊敬しております。ただ、今後ご協力の約束はできません。大佐に借りもございませんし、こちらの好きに投票させていただきます。お別れでございますな、ラミール・バストス大佐」

老アルティーンノは頭を下げた。目はガラス玉のようだ。トニコが門扉まで大佐を送った。

「父はあのとおり頑固で偏屈ですが、たぶんわたしが……」

アルティーンノはトニコの手を握ると、言葉をささげつた。「あの調子だと、お父上はいずれ味方を失うことになると思ひます。残るのはいちばん忠実な友人が二・三人というところでしょう」と言ううち大佐はエレガントな若者、「フンコロガシ野郎」を見た。「わたしは、ムンデイーニヨさんが正しいと思つとります。イ

リエウスには新しい舵取りが必要ですよ。したがって、わたしはムンデイーニヨさんの側に付きます。ただ、あなたにはお父上のそばにいて、言うことを聞いてあげる義務がある。交渉したり、和睦を求めたりする権利はだれにでもありません。慈悲さえ求めてもよいでしょう。でもあなたにはその権利はありません。あなたがなさらなければならぬこと、それはただひとつ、お父上のそばにいてあげることです。命を賭してもお父上のそばにいてあげてください。それ以外のことは考えてもいけません」

もうひとつの居間の窓から興味深げに顔を出しているジェルーザに挨拶をすると、アルテイーノ大佐は邸を後にした。

(続く)